

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA

でぽら

16

'99春夏号

特集 [ムラ] へ。新しい暮らしを求めて | ターン!







# [ムラ]へ。 新しい暮らしを求めて「ターン」! 特集企画に寄せて

**全**国各地の過疎地域は、その多くがこれからの地域の活性化に悩んでいる。しかし、交通網が整備され、交流施設や文化施設が出来、活性化の手がかりは得られつつあるといっているのではない。都市の人たちとの交流や産直ルートの開発にも力を入れてきた成果が各地で実りつつある。過疎化が進んでいくため、これまでは、「農業だけで食べていくのは本当に厳しい。農村で後取り息子の結婚相手を探すのは容易じゃない」農家の親たちの多くの思いはこうだった。手塩にかけて育てた子どもたちは高校を卒業すると、就職先を見つけ、また大学進学で当然のように都会へ出て行った。確かに今でも人口減少は続いているが、子どもが自立し、自分の力で人生の進路を見いだし幸せになってくれればそれでいいと考えれば、都会に定住するのも、それはそれで認めていくほかはないといえる。

**過**疎に悩んできた、そんな農山村がいま少しづつ再認識されるようになってきた。人々の価値観が急速に変わって、「田舎の魅力」を見出した沢山の都会の人たちが「ターン」、ターンしはじめたのである。

都会での慌ただしい生活、喧噪な環境。仕事人間として、ストレスの多い都市で働きづくめであることへの疑問や不安。趣味や夢らしいものを持つゆとりもなく過ぎていく日々。子どもたちがモノの豊かさだけを求め、自然にふれたり汗することもなく大人になっていくことも心配だ。都会で生活している人たちの半数近くが、農山村へ定住したいとの結果が出たアンケート調査もある。

都市生活に疑問を持った人たちが、もつとゆとりを持てる新しいライフスタイル——人間的な豊かさ、ゆとりある住環境、家族との

団欒、健康的な食生活、趣味や生きがい等——を求めたら、豊かな緑と空間に恵まれた田舎暮らしにいきついたのは、ごく自然のなりゆきだと思う。

風の音を聞き、太陽の光を浴び、降る星を眺める。大地や水、木々に肌で触れる素晴らしさ。家族との顔が見える生活があり、動物たちも家族の一員として伸びやかに暮らせる。自分で作った野菜は旨く、地元で取れる海や山の幸は新鮮で美味しい。

田舎で収入を安定的に確保していくことは決して生やさしくはないが、発想を替え努力すれば何とかやっていると「ターン」者は実証した。今はマイカー時代だ。空いた道路を突っ走れば、県都や地方都市の職場へ通勤するのも、もうごく当たり前の時代である。無農薬野菜の直売、機織りや木工品作りなどを通した体験交流、畑や果樹のオーナー制度、いろいろなアイデアをいかした交流事業や新しい生きがい対策が、都会の人たちに喜ばれ人気を呼んでいる。お互いに素朴な「遊び心」があるから、ゆとりを持って時間を楽しめるのだ。

**今**回「でばら」で取材させていただいた「ターン」者たちは、人間味豊かな魅力溢れる人々だった。時代に流されることなく、自分を見つめ、自然やその土地の風土や人々を愛し、地域にしっかりと根を張ろうとしている。

さらに、一見無鉄砲と思える男たちの夢や行動を理解し支える奥さんや子どもたちの存在も大きい。地域の人々の暖かいまなざしも定住の大きな要因となっている。

「ターン」者を迎えた地域や町村は「彼らが地元の人々が忘れていた自然の素晴らしさや

山村や島の生活の良さを再認識させてくれた。地域に刺激と活力を与えてくれた」と一様に移住を歓迎している。

しかし一方で《よそ者》的見方をする土地が依然としてないわけではない。地域共同作業への消極的な態度や、開発事業への反対がきっかけで村で孤立してしまった家族に出会ったこともある。地域の一員として理解し合っただけでなく、新しい近隣関係をどう築いていくか、お互いにじっくりと考えていきたいものである。

「でばら」に登場していただいた方々は、田舎暮らしのキャリアも長く、プロフェッショナルとして、技術や能力をいかして地域に貢献する人々が多かったが、一方で「のんびり遊びを大切に暮らしたい」というエンジン・カントリライフへの欲求を持ち、そんなひとときを上手に取り入れている。

「ターン」して夢の生活を実現するのだとあまり気負わないで、田舎へ行ってマイペースでしばらく暮らしてみるのもまたよいのではない。定住するかどうかは、それからゆっくり慌てずに決めても十分間に合う。住まいは田舎に建て、仕事は都市へ通勤という選択肢もある。

過疎地は、人口が減少し高齢化が進んでいるとはいえず、田舎の高齢者のほとんどは元気で親切な人たちだ。周りの緑豊かな自然は、やはり大都会では味わえない、素晴らしい魅力に満ちている。知らず知らずに都会で失ってしまったかも知れないものを取り戻し、新たな人生の転機となることもある。

田舎は、いろいろな人を迎えるゆとりと優しさを持っている不思議な場所であるということも、この際付け加えておきたい。



「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村数は1231、全市町村の38%にも達しています。過疎地域は貴重な自然環境と農林水産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土が多数残っています。農山村の活性化と発展をめざすため、地方と都市を結ぶ交流誌として『でぼら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

●写真/表紙①

左側・上より/長崎県大島町のペンション「マイネフロイデ」の美しい夕映え。森林作業員として働く本間明子さん。

右側・上より/清水牧場・チーズ工場の清水さん夫妻、京都府美山町の里山風景、農業をする草地康子さんと地元の主婦。

●写真/目次

上より/十島村宝島・牧口光彦さん、富山県婦負森林組合で働く1ターンの若者たち、田中正信さん(右)、小嶋久雄さん(左)

▼大島町・松永さん夫妻



[ムラ]へ。新しい暮らしを求めて1ターン/ 特集企画に寄せて——2

■大地の恵みをいかして

・宝島で楽しく暮らすための実践的  
地域づくり 牧口光彦さん——4

(鹿児島県十島村)

・“農的暮らし”に未来を託して——7

草地康子さん(京都府美山町)

・あるがままの大自然の味

[SVARASA]チーズを消費者へ——10

清水牧場・チーズ工房(長野県北御牧村)



■森や生物と共生する



・選んだ仕事は山仕事

女性森林作業員・本間明子さん

(富山県婦負森林組合)——13

・山の暮らしに魅せられて  
早池峰山麓タイマグラに移住

奥畑ファミリー——16

(岩手県川井村)

・障害者と共に“手仕事を”——山里の機織り工房、昼下がり

[志とり工房](岐阜県岩村町)——19

■ムラを元気にする風になる

・“誇り高き落ちこぼれ”はみんなの人気者

[大石田百姓保存会]田中正信さん(山形県大石田町)——22



・航空パイロットから「百済  
の里」の語り部に——24

小嶋久雄さん(宮崎県南郷村)

・大都市ホテルマンは島へ  
移住してペンション経営

松永仰一さん夫妻——26

(長崎県大島町)

■過疎のむらから地球が見える③

心は大空を翔び、草原や沼に佇む

鷲鷹に魅せられて30年

真木広造(動物写真家)——29



越冬するノスリ

●編集後記/奥付け——31





# 宝島で楽しく暮らすための 実践的地域づくり 牧口光彦さん (鹿児島県十島村)

平家落人伝説が語り継がれる鹿児島県十島村の宝島は、迷路のような狭い坂道が網の目のように走っている。どの辻もT字路になっているのは、源氏の追手から逃れるための工夫であった。

宝島へは、鹿児島市から32.4km、村営船「としま」で14時間30分の旅である。他に交通手段はない。東京都の小笠原を除けば、本土から最も不便な島であろう。

宝島の人口は、130人弱。畜産と漁業が

主産業、年間に約1億円を売り上げる。公共事業も、島民の大きな収入源になっている。他に、ピワやミカン、パッションフルーツ、サンセベリアなどの商品生産の農業も模索しているが、定着するまでには至っていない。東京で開発プランニングの会社に勤めていた牧口光彦さん(37)が、宝島に暮らし始めて12年間。2年前から、自然塩づくりを始めている。

## 美しい海を生かして 「宝の塩」を新しい産業に

これまでに、島でできる仕事のうち牛飼以外はほとんどやった。2月には黒砂糖作り、3月はピワの収穫、4月は田植え、5月がトピウオ漁。冬になると、イセエビ漁が始まる。夜、懐中電灯を持って、素潜りで、海に入った。

どの仕事も島民のように、上手いかなかった。それならば、自分が得意とするところで、島に役立つことをやった方がよいと、宝島の新しい産業を目指したのが、塩作りである。商品名は当然のように「宝の塩」と決めた。今のところ、海水の美しさと自然を丸ごと閉じ込めた味が受けて、在庫なしの順調な滑りだした。

朝6時30分、南の島の冬は、夜明けが遅く、まだ暗い。牧口さんは、宝島集落の一番上にある自宅から、海岸の製塩場まで、軽自動車

のパンで一気に走り下りて、塩炊き釜の火の具合を点検する。一日の始まりだ。

海水を10トン、半地下のタンクに汲み上げる。この海水を、カンレイシヤを張った枠の上から流し、自然の風と太陽熱で濃縮させる。塩分濃度3%の海水が、15%の鹹水になるのに、約一週間循環させる。この後、ビニールハウスの中で、さらに水分を蒸発させる。天気の良い日ならば、一日で塩ができる。天日塩だけだと生産が天候に左右されすぎるので、煎ごう塩(釜焚き塩)も並行して生産する。鹹水を縦2m、横1m、深さ20cmの鉄鍋で、15時間ほど焚いたあと、ニガリを取ると、30kgの塩ができる。

焚くのは、もっぱら共同業者の平田秀喜さん(48)だ。牧口さんは、薪採りである。海岸の流木を探して歩く時には、潮風に吹かれ解放感がある。防風林であるモクマオウの風倒木を探して森の中を歩けば、普段見ることのない小動物など、島の自然と出会うことができる。塩の仕事を始めてからは、朝日を拝む機会も多くなった。

「得したような気分になります」と、牧口さんは、満足そうだ。

他に、通船作業と温泉管理をしている。

鹿児島市と吐噶喇(とから)列島の島々を結ぶ村営船「としま」が入港するのは、往復で週4回。荷役をする通船作業は、青年団の義務である。50歳までは全員参加が原則の青年団。島民13人、Iターン者が3人の計16人である。しかし、職場を抜けることのできない発電所と郵便局の職員は作業を免除される。Iターン組の他の2人は出てこないで、通船作業は10名で行なう。荷物の数で多少の差はあるが、3ヵ月でおよそ4万5千円の収入になる。割に合う仕事ではない。しかし、通





▲ゴミ取り。出来上がった天日塩は美しい海の結晶だ



▲共同作業者の平田さん(左)



▲海水を半地下のタンクに汲み上げる



▲森へ薪採りに行くのが楽しいと牧口さん



▲ビニールハウス内でさらに水分を蒸発

▼カンレイシャを張った上に流して循環する



船作業は島の生命線、これを疎かにすることはできない。

典子夫人(35)と、4歳になったばかりの双子の息子たち、それに2歳の娘。家族5人が暮らす自宅は、集落の一番上に建てた「フラドーム」。村道から、草のしげる山道を下ると、忽然と宇宙人の秘密基地を思わせる丸屋根のドームが出現する。周囲に民家はなく、緩やかな斜面を切り開いたドームは、押し寄せる自然と同化するように、ひっそりと建っていた。

富士山の観測所が同じ工法で建てられているが、三角形を組み合わせたトランス構造のドームは、直径10m、50畳の広さがある。基礎工事に1年、パネル作りに1ヵ月。組み上げは、島民20人に来てもらって1日で終わった。建築総費用は500万円。十島村から定住促進住宅資金を借りて、25年間で返済する予定だ。

### 25歳の時 体験学習できた島に永住

牧口さんは、東京の生まれ育ちである。以前の仕事だった地域開発プランニングは、デスクワークばかりで、フィールドに出る機会がないのが不満だった。偶然、吐噺喇列島の一つ中之島で、2週間の子どもキャンプに付き添った時、島には豊富な自然があり、島民の暮らしぶりにも魅力を感じた。開発プランを立てるにしても、地続きの土地より島の方が結果は見えやすい。「島」が、牧口さんの仕事の対象地として、急速に現実のものとなった。「そのためには、島をもっと知りたい」と25歳の時、会社を辞めた。同じ吐噺喇列島の宝島に、3年間のつもりで、単身移住したのだ。あくまでも、仕事のための経験と考えて

いた。

「東京の3年間は長いが、島の3年間は、まだまだ足りなかった。時間の流れが、都会とは異なるのを知りました。島の3年位では何の役にも立たなかったのです」。

10年間で過ぎた頃になって、「島に残って良かった」と、思えた。消防団や青年団にも入って、飲んで話せる島の友人も出来た。

「二生かかって、宝島のことしか出来ませんでした。というようなことになるかも知れませんが、僕のフィルターを通して、島のために良かれと思ってやっているだけで、結果として、島のためになるのかどうか分からない。理想としては、島が僕の能力を利用、僕も島の人達の能力を利用させてもらって、上手くいけば良いのだが」。



荷役(通船作業)をする牧口さん



▶港の壁には島の若者たちが描いた絵が人目をひく

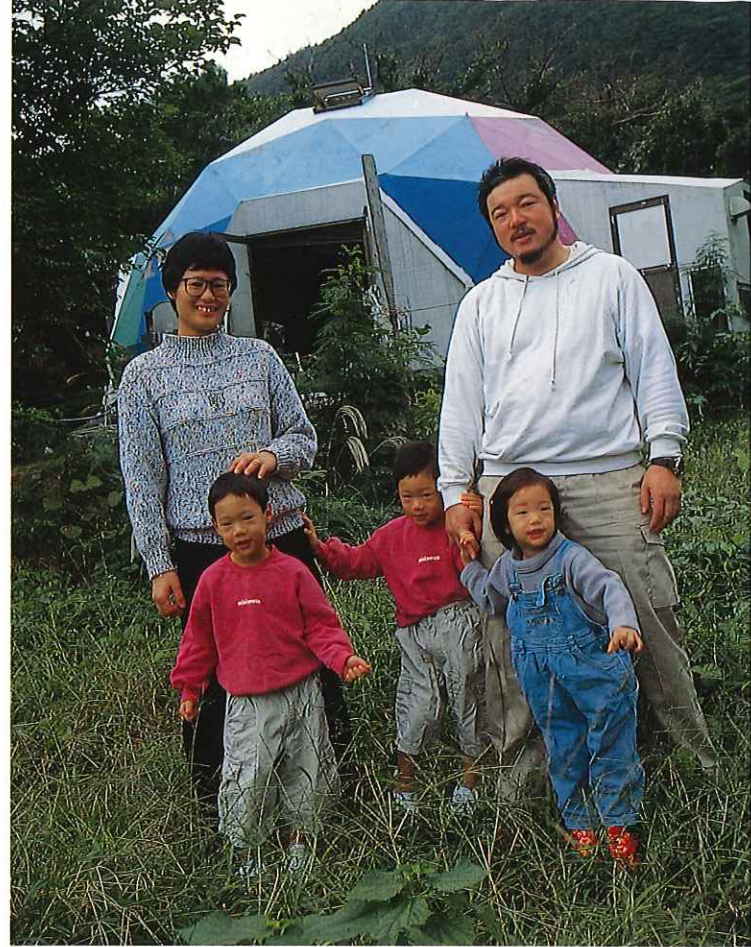


## 島の青年達と バンド演奏活動

宝島には、「宝島マリンサウンドスチールオーケストラ」という名のスチールドラムバンドがある。8名のバンドマンは、週一回の練習を欠かさず、イベントに呼ばれては、演奏活動を続けている。

スチールドラムも、牧口さんが宝島で仕掛けた島おこしの一つ。「島の青年たちと一緒に何かやれたらいいな」と考えていた時、島のあちこちに転がっていたドラム缶を使うことを思いついたのだ。今では、本土のイベントにまで呼ばれて、出かけて行く。

「楽しく暮らすための地域づくり」を人生の課題として、島に暮らしている牧口さんだが、東京が嫌いになった訳ではない。しかし、東京は住みづらい所だなと、思うようになって



▲牧口さん一家。典子夫人と双子の洸太、湧太君、2歳の優花ちゃん。後に見えるのがドームの家 ▼フラードームの家の中。広くて天井も高い

いる自分に、近頃気付いている。

「小学生の時にポルシェ博士の伝記を読んで、より多くの人間の幸せを追求しようとする生き方に感動した。そんなユートピア作りを、この島で実践したい」と、牧口さん。

島民とは、一定のスタンスを保ちながら、限りなく島に寄り添おうとする牧口光彦さんは、本来の意味で自由人なのだ。宝島は、自由人を抱擁する懐の深さを持っている。

「二年間に何件かは、移住の問い合わせがあります」と、十島村役場総務課の久保源一郎さん(43)。自然と人情と自由を求めて、島で暮らしたいと望む都会の人々は後を絶たない。村としては、村営住宅を準備し、5年間定住すれば返済免除になる「定住促進生活資金貸付制度」を設けて、積極的に受け入れる態勢を整えている。

牧口さんは、「島では昔から、他所から来る



## 島へ行きませんか

人々を、「先生」と呼んで歓迎していたが、Iターン者は、島社会のルールを尊重しようとする意識が薄いのではないかとちょっと不安げだ。願望だけでなく、はっきりと目的意識を持った移住者を、島はいつでも待っている。

文・写真/芥川 仁



前方に見えるのは宝島の多自然地域

近年、田舎暮らしを希望する人の中から、特に「島の暮らし」を求める人が増えている。都市化した中途半端な山村ではなく、島などの多自然地域で農林漁業に従事しながら、趣味のダイビングや釣りなどをしたと考える人が多くなっているようだ。

全国離島振興協議会では、平成7年に「離島Iターンバンク」を開設、離島定住促進を支援するための事業を行ってきた。

離島Iターンバンクには、現在800人の登録があり、島の暮らしや仕事、イベント等、島の各種情報を提供している。

一方、受け皿となる島の自治体は離島振興協議会加入が229市町村ある。同会の調査ではIターン促進に対応できる条例・制度を設けている、準備中の市町村は73だが、「将来設けたい」が103市町村あり、Iターン促進の施策に力を入れはじめている。

島に関する問い合わせは全国離島振興協議会 ☎03(3222)1151へ。



# “農的暮らし”に未来を託して

草地康子さん(京都府美山町)



自宅の前の畑で草地さん

「マメは自分のリハビリと再教育の場なんですよ。カマやナタをどう使い、どう研ぐのか。マメを収穫して食べるまでにどんな作業が必要か。そういう知識をこれまでの教育の中で何も教えてもらわなかった。私はここで、物を作る手”を取り戻したいんです。」  
草地(神田)康子さん、神田浩史さん夫妻が美山町で、百姓を始めてほぼ一年がたった98年秋、20アールの田圃に初めてコシヒカリが実った。  
草地さんはその感激を知人宛の(山里つうしん)(草地さんがときどき発行する私信)に次のように記している。  
「稲木に揺れる稲穂を見てまず思ったのは「これで一年は飢えることはない」ということ。これはすごいことではないか」と。

## “農的暮らし”を求めて首都圏から

草地さんは東京都立大を出て、しばらく通産省の外郭団体でODA(政府開発援助)にかかわっていた。しかし、開発が進めば進むほど貧困が拡大する現実に疑問を感じ、88年に神田さん達と現地住民の立場からODAや公共事業の在り方を考えるNGO(非政府組織)を作った。

そして「世界の資源の3/4を1/4の人口が使い尽くす南北間の不平等を変えていくには、北自身が大量生産大量消費の社会を見直し、生命系に即した暮らしに変わっていくしかない」という考えにいきつく。

そうした中、ある人から「百姓の立居振る舞いも知らんモンが、農村開発を考えることなどできるはずがない」と言われたのが、「百姓」になるきっかけだった。

草地さんは神奈川県横浜市に生まれ、千葉県松戸市のベッド・タウンで育った。「農を基本にした暮らしがしたい」と言う草地さんに、母は「そんな娘に育てた覚えはない」と猛反対した。

「神田君も私も南北問題から『農的暮らし』に入りました。二人ともそれまで農村での経験があつた訳ではないし、恐い物知らずと言うか、全部自分たちでやろうとする傾向があつたんです。しかも頭から入っていたので、できるだけお金をかけない自然のサイクルにあつた方法でやろうとしたんです。でも、それは能力の限界を超えていましたね。」

東京、農的暮らしを始めた長野県安曇野、そして美山町へ。草地さんの「農」の経験はもう12年に



▲人糞の貯蔵庫  
▼生ゴミも有機肥料として畑に



なる。その間に2人の子供の母となった。草地さんの生活は実践そのもの。借りた畑(15アール)や田圃で自給の野菜やコマを作っている。もちろん無農薬栽培。肥料は敷地内に設置した「バイオ・トイレ」から出来る無臭の糞液、「コンポスト(バイオ・バケツ)」で生ゴミから作った有機肥料。そして、「畑と相談して」穫った野菜が日々の食卓に上がる。  
風呂の燃料は薪と太陽熱とガスを併用している。薪と一緒に燃えるゴミを燃やしたり、掘り炬燵の豆炭もおこす。また、特徴ある燃料として、バイオ・トイレから出る「バイオ・ガス(メタンガス)」がある。その「バイオ・ガス」で、冬は2日で1回、夏は1日1回、やかん1杯分の湯が沸く。  
夫の神田さんは、京都市を拠点に有志で京都自由学校を作り、「百姓入門講座」を開いている。また、NGOの活動で海外の開発調査に出かけることもあるので、家を開ける日も多い。  
次第に農作業や家事の半分以上は草地さんがこなすことになった。  
自宅には年間延べ200人もの国内外の友人・知人が訪れる。周囲からは「大変やね」と言われるが、草地さんは涼しい顔でそういう暮らしを楽しんでいる。





### 独自の取り組み——美山方式

草地さんが暮らす美山町は、京都市から国道162号を北上すること約60km、丹波山地の北部に位置する。55年4月、5村が合併して町政を施行。府下の町村中最大の面積を有する。四周を連山に囲まれ、由良川の上流域を除いて全域が標高800〜900メートルの中山間地。

中山間地特有の小規模農業、そして町域の95パーセントを占める山林を生かした林業。典型的な「山が里に下りてくる」状態にある。高度経済成長期以降の若者の流失と人口の高齢化の傾向は他の山村と同様。町制施行時に1万人を越えていた人口は半減し、現在は約5500人。

しかし、美山町が他と違ったのは、それによって対抗しようとしたかということ。外から資本を入れずに独自の工夫で業を起こしているとした。なめこ生産組合や漬物工場を作り、農協も早い時期から無農薬野菜のコンテナ産直を始めたり、低温殺菌の牛乳工場を作り給食牛乳を自前で賄うなどの努力をした。町の条例で大型店もゴルフ場も進出できない。産廃処理場の計画には町長が阻止のための裁判を起こすなど、「変わった」農村なのである。その取り組みや努力は「美山方式」と呼ばれて評価され、成功しつつある。

そして近年美山町は観光の町としても注目を浴びている。町内は約250戸の茅葺き民家が残る「茅葺き民家の里」で、93年には北集落が、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された。同地区には50戸の古い民家が点在し、約半数が茅葺き屋根。その中には築200年の農家住宅を公開した「かやぶき民族資料館」があり、山村の歴史資料、生産・

生活用具などが展示されている。

ここ数年、美山町の美しい農村風景に魅せられた芸術家や新規就農者の転入が増加している。また、94年には、地域福祉の総合的な拠点「美山やすらぎホーム」が完成し、近隣からの高齢者の転入もある。それにUターン者も含め、町の人口は僅かではあるがプラス方向に向かっていく。

### 主婦達が力を合せて「喫茶・花水木」

観光の中心が「茅葺き民家」の北集落なら、町の中心は町役場や農協、郵便局などがある場所だろう。そこに96年4月、地域住民の自主的活動の拠点となる美山文化会館（通称、文化ホール）が完成した。鉄筋の建物は520席のホール、図書館と研修室のある生涯学習棟、展示ギャラリーの3棟に分かれている。その展示ギャラリーの2階に、草地さんが中心となって経営する「喫茶・花水木」がある。スタッフは草地さんを含めて女性9人。そのほとんどが夫のUターンに伴ってインターンした兼業農家のお嫁さんだ。店に入ると「いらっしゃい」ではなく「こんにちは」と笑顔で迎えてくれる。

営業時間は、月曜日〜金曜日の10時〜17時。スタッフが主婦なので、土日に営業しないというのも店の特徴の一つだろう。

人気のメニューは、「冷蔵庫と相談して」から献立が決まる「日替



▲昼食時の店内

▼▶ スタッフの皆さん



わりランチ」と手作りケーキ。食材には地元産の農産物を中心とした自然で安全なものが使われている。「自給の農産加工品」、これが店の最大の「特徴」だ。

お客さんは役場の職員や文化ホールを利用する地域の住民。立地条件や営業時間の関係から観光客は来ない。反面、会議室などへのまとまった出前注文がある。通常は3〜4人で店を切り盛りする。空





▶人気の花水木カントリー  
ケーキ、クッキー

いた時間には帳簿つけや材料の発注、伝票処理等をテキパキとこなす。そして、17時には掃除や次の日の準備も完了し、それぞれが夕食の仕度をするために大急ぎで家に戻る。

初めは3人で時給3000円から始まった「花水木」、その売り上げを押し上げたのは、2年前から町の観光センターに置くようになったケーキとクッキーだ。そのため、金曜は朝から土日の観光客用のケーキとクッキー作りにスタッフ総出で大忙しとなる。今ではスタッフ9人、自給650円までになった。

店の中ではよくスタッフ同士の輪ができる。その中で問題点や新たなアイデアが提案され、話し合わせ、あつという間に決定したり、実現することも多い。スタッフ全員が力とアイデアを合わせ、無理をせずゆつくりと店を育てている。

また、地域やサークル活動など、女性の方が男性より遥かに多くのネットワークを持っていることもあって、「花水木」のスタッフも全員女性。お客さんも女性が多い。顔が見える関係が、そうしたネットワークをさらに広げることによって役立っている。

◀畑仕事をする草地さん  
後が自宅



ってハッピーでなかったことも事実ですよね。家の中では嫁よりもそれ以外の家族が大事、女の子が産まれるよりも男の子が産まれると喜ぶ。農村での新しい男と女の関係、家族の関係を作っていくことができなければ、男達は村に帰ってきてても女達は出ていくことになるでしょう。考えてみれば、「娘は農家に嫁にやらない」というのは家族制度に痛めつけられてきた母親達のゆつくりとしたストライキとも思えるのです。農村は女にとって新しい関係を作れるチャンスなのかも知れませぬよ。」

### 農業の10年先が心配

美山町が今、大きく揺れている。

引き金は秋に予定される農協の広域合併。この合併計画には、金融自由化に端を発したビッグ・バンに伴う法改正で、信用事業継続には町単位の単協では弱いため、市町村を越える広域組合にし原資や事業の規模を拡大しようという背景がある。

美山町の場合、近隣の園部、八木、日吉、京北が合併の対象で、郡を越えた広域。最終的には、農協を都道府県単位で一つにする計画とか。

去年7月、「美山農業者連絡協議会」という会議が開かれた。農協が合併すると美山の農業者の声を取りまとめる機会が少なくなることを心配、存在さえも忘れていた組織を引っ張り出し、強化を計ろうというのが狙いだ。

会議には花奔部会、養鶏部会、畜産部会など、それぞれの分野の主だった人が出席。草地さんも美山農産加工協議会の役員として出席した。組合長は、金融合併であること、金融自由化に伴う法改正で美山独自では信用事業継続は難しいこと、合併には身を軽くする

ことが条件であることなど、合併計画の詳細を明らかにした。

それを受けて色々な意見が出された。それらの基調は「農業を支え続けるのはあと10年もたない」、「なんとか小規模生産でも生き残る道を見つけた」というものであった。

今や農業の担い手は70代の高齢者。後継者はいない。広域になれば、家族の食べるものプラスアルファの美山の農業は片隅に追いやりられ、顧みられなくなる、という危機感が非常に強かったという。

### 家族農業が必ず見直される…

「会議では、皆さんがあと10年という話をされていましたが、あと20年したらどうなるだろうと考えるが聞いていました。20年経てば環境問題や食糧危機等から、農業が見直される時代がやってくる。その時、見直される農業は大規模に工業的にやるものではなく、美山に残されているような家族の食べるものプラスアルファの農業でしょう。それが世界的な意味をもつ時代がきつと来る。しかし、その20年を保っていけないのではないかと心配です。私は『農的暮らし』に未来があることを確信しています。でも、環境問題等をやっている人も、循環を基本とした農的な暮らしがいらいらしいところにはいき着くけれど、その具体的な方法、社会や人と人との関係は未だに漠としているんですよ」

作物を荒らすシカやイノシシと知恵比べをしたり、燻製やパン作りを覚えながら、草地さんは少しずつ山里の暮らしに溶け込んで来た。それは同時に、自然の中で生きるための「物を作る手」を取り戻すことにもなっている。



▶放牧されているブラウンスイス牛  
奥に見えるのが牛舎  
下はフィンランド産の羊たち



## 大地の恵みを生かして③

牛舎へ出かけては牛を見るのが好きだった街中生まれの少年は、畜産大学で学び、各地で牛の世話をしながら、ついに牧場経営へ。理想の酪農を求めて愛する家族と牛たちと遊牧しながら、長野県北御牧村へたどりついた。  
効率優先、工場生産のような酪農でなく、牛の身になって牛本来の飼育をする。そこから得た牛乳からとびきり美味しいチーズやヨーグルトを作っている。

### 夕映えが美しい丘陵地

北御牧、村の名の由来の御牧台地は小諸市から望月町辺りまで続く広大な丘陵地で、平安時代の朝廷の牧場遺跡があることから、牧場の発祥地の一つではないかという。

その一角、標高約800mのところに清水牧場がある。東南には八ヶ岳から蓼科山、西

## あるがままの大自然の味 「SVARASA」スヴァラサ チーズを消費者へ 清水牧場・チーズ工房（長野県北御牧村）

北に浅間連峰、南西に北アルプス等信州の名峰が360度展望できる。そこに、ちょっと毛色の違う羊や牛たちがのどかに放牧されていて、手前には二階建の家と乳製品加工場、奥には牛舎がある。あとで聞いてびっくりしたのだが、何もかも清水則平さん(41)が手作りしたものだという。

まず出迎えてくれたのは奥さんの晴美さん(41)と3匹の犬たちだった。

「アルプスの少女ハイジ」の中に『どうして山が燃えているの?』というセリフがありますが、この夕映えはそんな感じ。山並みが真赤になり、前後して淡いピンク色になるのがそれは美しいんです」

家の横にある雑木林では、春には山菜、秋にはキノコや木の実が取れる。清水牧場では、作ったチーズやヨーグルトはすべてクール宅



宅配便に手作りのX'masツリーを入れて

急便で直接顧客に届けているが、乳製品の中に必ず木の実や山菜、ドライフラワーなどをに入れて、ひと言手紙をそえる晴美さん。その日も集荷車が来る時間に合せて忙しそうだ。

間もなく、乳製品づくりの作業の合間をぬってご主人の則平さんが現われた。牛の世話を20年間続けてきた人らしく、やさしくおだやかな目をしている。

### 岡山の牧場経営を経て信州へ

清水さんは藤沢市の会社員の次男。当時は市内にも牛を飼っている家があり、毎日見に行った。牛に興味を持った少年は日本獣医畜産大学へ進み、休みを利用して全国各地の牧場へ実習に出かけた。北御牧村もその当時お世話になった農家の紹介だという。

岡山県のホクラ酪農専門農協へ行った時当時の参事に「日本の酪農は君のようにやる気のある人が必要。将来必ず牧場を持たせてやるから、ぜひうちへ来なさい」といわれ、卒業と同時に岡山へ単身乗り込んだ。

仕事は酪農ヘルパー。100軒から200軒の農家をまわり、5000頭を越える牛の世話をした。給料は少ないが、それぞれの農





◀奥さん手作りのパイとできたての  
ヨーグルトやチーズで美味しい昼食



家のアイディアや異常時の牛の対応など、大変勉強になったという。

昭和57年、24歳の時大学の同級生だった晴美さんと結婚。彼女は大学院出で大手企業の重役の娘、最初は結婚を断られたが、何度もアタックしてOKさせた。熱血漢なのだ。

その年の4月、事故で後継者を亡くした牧場を引き受けることになる。一銭もないので頭金も、乳牛30頭も借金、無理だろうと思いつつ5000万円の借金で牧場経営をスタートした。借金返済のために夢中で牛の世話をしながら、荒れ放題になっていた牧草地を整備し、中古ながら機械を揃えてサイロも作った。

生活が落ち着いてホッとした時、清水さんは考えた。「自分のめざしていたものはこんな

生活だったんだろうか」と。牛乳生産機械、能力向上のような仕事、誰が飲むかわからない牛乳を生産し続ける仕事に疑問を持った。

大学で家畜栄養学を専門にしていた彼は、牛乳加工について徹底的にやり直し、チーズの素晴らしさと出会っていく。資料を集め、酪農試験場へ通い、失敗を重ねながら6帖のプレハブを改造して、一年がかりで研究開発。清水牧場の「SVARASA」(スヴァラサ)があるままの自然味の意)チーズ工房はこうしてスタートした。

「しかし、美味しい納得のいくチーズを作るには、従来のホルスタインで機械生産的にやる牛乳ではダメで、乳製品作りに合ったジャージーやブラウンスイス牛を、牛本来の飼い方で飼うことだという答えに達しました。つまり乳量は望まず、牛の一番気持ちのよい状態で得られる牛乳から作ったチーズが最も美味しい」と

チーズ工房は順調にスタート、県の指導で酪農家が集まって協同で工房を作ることになり、清水さんは代表にされ、ヨーグルト製造も成功させた。しかし一方で、酪農家仲間にはよそ者のスタンドプレーのように見られ、自分の求めた酪農と現実とのギャップはあまりにも大きい。

三重県にある新牧場の話があり、彼は移転を決意した。牛50頭に二人の子供と奥さんをつれての「遊牧大移動」は、一冊本が書けるほどだが、滋賀県の信楽で仮営業したものの三重県の話は間違いだったとわかる。そこで各地の酪農家等を通じて新牧場を探し求め、やっと手に入ったのが北御牧村だった。明日の米もないような生活を続け、50頭近くいた牛は半分になったが、たどりついた御牧台地は素晴らしいところだった。

もと畑で休耕地だったところを開発公社が担い手育成事業として買い上げて清水さんに貸出し、5年耕作したら売却するという方法で入手した。3000坪だから牧場としては広くないが、他に2000坪を牧草地として借りている。標高が高いこともチーズ作りの大切な条件になっている。

### 牛舎も家も手作りして



▲夕方から牛舎の掃除、エサやり、搾乳

家族は村営住宅に入り、早速牛舎作りがスタート。酪農家で大工の腕も優れた坂井さんという人が協力してくれて、辞めた酪農家等から廃材や中古の機械を購入した。

「牛舎作りでは高い所の作業が本当に大変でした。ハシゴを登り、その上での溶接作業。顔も腕も火傷だらけでした」

大きく立派な頑丈な牛舎である。清潔な牛舎で牛たちはゆったり飼育されており、母牛の隣には仔牛もいる。岡山からの苦難な旅を共にした牛たちはすでに亡くなっているが、



▶午後は農家へワラ集めに。最近では企業が畜産に参入してワラを高く買い占めるので、清水さんは憂慮している  
帰ると牛たちと挨拶を交わして体調チェック  
子育てをしている母牛には特に気を使う



その子供、孫たちが成牛となり、清水牧場を支えている。

チーズ作りに適したジャージーとブラウンスイスは草を好む。彼は冬場のワラを除いては自分の育てた草だけで育て、配合飼料等は使わない。いま30頭いるが、搾乳できる牛は15〜16頭だけ。

「牛にそろそろ種付けしていいかいと聞いてやるんです。健康状態を見て発情をするまで待ち、出産後もしばらく母牛に子育てをさせますから、乳量は少ないんです」

ホルスタインは牛乳多産用に作られた牛で、一年に一産を強いられる。そのためエサも濃



チーズづくりをする清水さん。時間と温度をきちんと管理しながらの作業。できたチーズは3ヵ月間熟成室で熟成させてでき上がる

厚な配合飼料が与えられ、3〜4年でポロポロになってしまふことが多いという。

清水牧場では12〜13年生きる元気な牛たちが多く、私達が傍へ行っても逃げるどころか親しげに近づいてくる。

搾乳の時間になると、清水さんはまず牛舎へ行ってクラシック音楽をかける。掃除をし、牛たち一頭づつにご気嫌はどうか、変化はないかと声をかけ、体にふれたりしたあと搾乳をはじめめる。

牧場には仔牛や搾乳期間を終えた成牛たちが放牧され、近くにはフィンランド産という珍しい羊ロマンノフたちの集団もいた。



貴族のような気取った雰囲気羊たちで、羊チーズを作りたいからと20頭近く飼っているが、二、三月に生産した時しか乳が出ないので、2〜3個しか作れない。草の香がする通好みのチーズで、注文が四、五年先までであると語っていた。

### 美味な「スヴァラサ」チーズが大人気

多忙な時間をさいてくれて、奥さん手作りのパイとできたのヨーグルトやチーズをこちそうになった。濃厚でコクのあるドリンクヨーグルトとヨーグルト。上部に黄白色の層があり、これがとても美味しい。搾りたての牛乳がそのまま結晶した感じのフレッシュチーズには手作りのジャムとパンがよく似合う。さらに3ヵ月間塩水で洗いながら熟成させる「山のチーズ」、バクテリア熟成独特のクセが特色の「森のチーズ」など、市販のチーズでは味わったことのない味だ。軽井沢などに住む人が美味しいと口こみで宣伝してくれたこともあり、いまでは固定客が付き、とくに夏場は大忙しだ。近くにはイタコンの仲間も多く、手づくりパンや味噌など交換することも。

朝夕の搾乳に加えて、乳製品づくり、農業や農家へのワラ集め、そして夜間は熟成中のチーズを一つ一つ磨く作業など、清水さんのスケジューリングは過密で、一日2〜3時間しか仮眠しないこともある。気がかりだが、

「手伝おうかと言っても、自分できちんとやらないと気がすまない人ですから」と奥さん。二人の子供達は今年から全寮制の有名中学、高校へ入学したため、夫婦だけになってしまった。だが、沢山の生きものがいて、一緒に暮らしていく、それが楽しく、若々しく働くエネルギーになっているのだらうと思う。

文／浅井登美子 写真／小林 恵



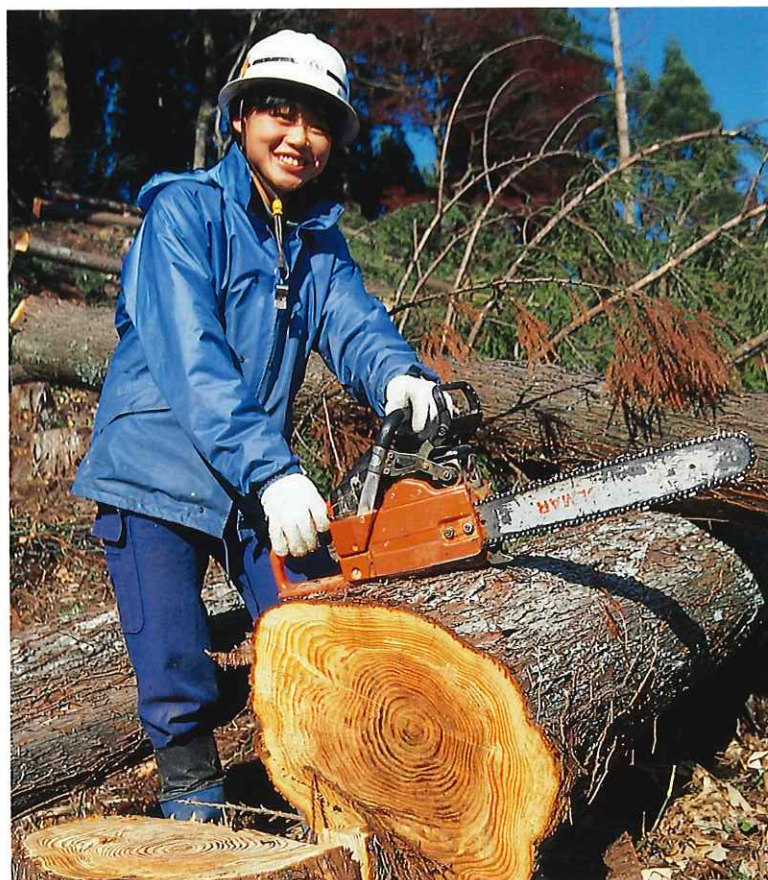


「木と共にあった良き時代が  
息づいているのが好き」  
選んだ仕事は山仕事  
女性森林作業員・本間明子さん  
(富山県婦負森林組合)

富山県が林業の後継者を広く県外から募ろうと、林業ヘルパー制度を打ち出したのは数年前。ヘルパー募集のパンフレットを見て応募してきた若者たちの中に、一人の女性がいた。横浜生まれの、生粋の浜っ子、本間明子さんだ。彼女を受け入れたのは富山県八尾町の婦負森林組合。事務職ではなく、山の現場で働きたいという彼女のたつての願いを聞き入れ、森林組合は彼女を現場作業班のメンバーとして迎えた。本間さんの山の暮らしが始まった。

二匹の犬と猫を連れて

本間明子さん(28)が「林業ヘルパー募集」の



パンフレットを見たのは2年前だった。当時の彼女は横浜でパン屋さんに勤めていて、休日の殆んどを丹沢の山で過ごしていた。ここ数年ブナの立ち枯れの目立つ丹沢の山で、ブナの全国的な救済活動を行っている「ブナ党」のメンバーとして、その原因究明のための調査や清掃登山、無秩序な開発への反対運動などに積極的に参加していた。

山梨・神奈川の両県にまたがる丹沢山塊は、都市近郊にありながら、自然の残された沢と美しいブナ林で知られ、多くの都市生活者に親しまれてきた。その丹沢のブナが酸性雨などの原因により、急激な勢いで立ち枯れてい

▲山の稜線近くで植林作業をする  
| ターンの花井・清水・山岡さん

▶チェーンソーを使う本間さん





▶「本間さんを大歓迎」と語る北山組合長



▶雨の日には弁当箱に雨が当たったという厳しい山仕事の環境は、この「リフレシユカー」の導入によって改善された。トイレ、シャワー、冷暖房完備。畳敷きの車内で昼寝もできる。

◀男性たちと林道造成のための測量作業



く。その様子は、ここ10年来、新聞やニュースでたびたび報じられた。

5歳の頃から親に連れられてこの山に登っていたという本間さんにとって、この事態に無関心でいることはできなかった。早速「ブナ党」のメンバーとなり、救済のための活動に加わって行く。

ブナに限らず、彼女の活動半径は、相模川河口堰や大規模林道への反対運動と幅広い。生き物や自然界全体が、常に彼女の視野の中に捉えられているからなのだろう。

富山県が配布した「林業ヘルパー募集」のパンフレットは、そんな本間さんの日常の中に飛び込んできた。

山で働ける。それもスキー場のような観光施設としての山ではなく、林業としての山仕事だ。富山が横浜からどれ程の距離にあるのか、どんな気候なのか、どんな所に住むのか。そんなことなどを考えるより先に、結論は出

ていた。

早速問い合わせを受けた富山県営林署は、都会からの、しかも若い独身女性からの応募に「正直言って、大変ビックリした」と、当時を振り返る。県では「林業担い手センター」という組織を作り、林業ヘルパーの応募者に一週間ほどの体験林業を勧めた矢先だった。年間50人余りが体験するこの制度は、山で働いてみようという全国から集まってくる若者を中心に実施されているが、実際に炎天下や寒風の吹く現場で、ナタやチェーンソーを使って、一日、二日と働くと、大体三日目位で半分以上が音をあげるといふ。最終的に現場に残るのは50人のうち12人位というから、その厳しさは想像できよう。

問い合わせを受けた県ではこの体験林業をまず本間さんに勧めてみた。ところが本間さんから返ってきた言葉は、予想に反して「ノー」だった。犬と猫を飼っているので、そんなに長くは家を留守にできない。体験林業は無理なので、直接移住の準備をしたい、という意向である。本間さんの意志は固く、県は八尾町の婦負森林組合に、彼女の受け入れを打診してきた。

北山虎雄組合長は戸惑いつつも、彼女が本気ならこちらとしては大歓迎したいと返事をし、早速受け入れの準備にかかった。空き家になっていた一軒家を買上げ、快適に住めるようあちこちに手を入れた。

「住んだこともない見知らぬ土地へ、林業の仕事をしたと言って来てくれるのですからね。組合としても出来る限りのことはお世話してあげたいと思っています。過疎化で空き家が何軒かありますから、組合の経費で借りるなり買上げるとしてね。県外から来てくれる人たちには、家賃も組合の補助がでます

から、月2〜3万円位で貸与することができると、組合としても林業後継者の受け入れ、育成には、どこまでも協力的だ。

移り住んできた本間さんに北山組合長はもう一度念を押した。

「本場に現場の仕事でいいんですか。山にはハチもおるし、ヘビもおるよ」

しかし彼女の希望は変わらなかった。婦負森林組合に10班ある作業班の一つに、こうして本間さんは正式に配属された。

### チェーンソーもダンフもこなす 度胸の良さ

雪を戴いた立山連峰が、澄みわたった富山の冬空にくっきりと映えて美しい。本間さんを八尾町に訪ねたその日、彼女たちの作業班は組合事務所からほど近い山の現場で、林道造成のための測量を行っていた。

若い男性3人に混じって急斜面から颯爽と降りてきた女性が、本間さんだった。遠目にその動きだけを見ている限りでは、男性と女性の区別がつかないほど、彼女の仕事ぶりは機敏で、堂に入ったものだった。

横浜からこの八尾町に移住して2年。数日の体験林業で7割の若者が音をあげてしまうといわれる厳しい山仕事を、本間さんはその体験もせずに始め、脱落することもなく頑張

立山連峰の雄峰を望む町並み







家へ帰ると2匹の犬たちを連れて散歩に出る本間さん。夜は手話サークルの会合やギター、ピアノ、バイオリンの練習と多忙な毎日だ。

「いやあ、彼女には驚かされることばかりでね。何しろこちらは都会から来た若い女のコードというんで、他の作業員の手助け程度になれば位に考えていたんですが、もういきなりナタは使う、ノコギリは使う。チェーンソーや下刈り機なんかもバンバン使うし、勘がいいというのか、度胸がいいというか。今では材木も積むし、ダンブも運転するしで、全くもう男顔負けですよ」

組合の島崎良平常務理事も現場の作業員の人たち同様、彼女の仕事ぶりに舌を巻く一人だ。

現在、本間さんの肩書きは製材機やカンナ板などの機械作業をチェックする木材加工用機械作業主任。チェーンソーや刈払い機などの安全操作の資格は、講習を受けて取得した。この日、本間さんの案内で、別の作業をしている仲間たちの現場も見せてもらった。杉やナラの樹林帯が広がる明るい山の稜線近くで、数人の若者たちが植林作業をしていた。神奈川県から来た最年少の花井秀尚さん(18)、埼玉県からUターンした日大哲学科卒の清水健一さん(28)、静岡県出身の山岡健二さん(35)の3人だ。

見渡せば、遙か向こうには日本海が臨め、山々の連なりは果てしなく広がっている。こんなに気持ちの良い職場が他にあるだろうか。暑さ寒さの苦労は勿論あることだろうが、都会の箱庭のような暮らしに比べたら、ここには、常に真剣勝負を試されているような厳しい本物の自然がある。

この山の斜面に立って、海からの風に吹かれてみると、横浜の暮らしをあっけなく捨て、この八尾の町に移り住んできた本間さんの気持が何だか解るような気がした。

### 都会は灰色の要塞に見える

仕事を終えた本間さんと一緒に、彼女の自宅に向かった。家では横浜から連れてきた2匹の犬と猫1匹が待っていた。犬たちを連れて畑の中のいつもの散歩コースを歩く。一日中待っていた犬たちはもう大喜びだ。「いつもは仕事の後も結構忙しくて、こんなにのんびり散歩もできないんですよ」

と、本間さん。週のうち3日は横浜時代から続けている手話のサークルの会合があり、他の日はギター・ピアノ・バイオリンの練習がある。バイオリンは10歳から習っているという本格派。ピアノも発表会に向けて「モーツアルトのトルコ行進曲」を猛練習中だという。

横浜時代の仲間「ブナ党」の機関紙「ブナ党通信」にも原稿を書き送っている。多忙だけれど、気持ち良い疲労が残る充実した毎日だ。雑多な情報の溢れる都会の暮らしの中で、彼女が何を捨て、何を得てきたか。その収支が、いまこの山里の暮らしの中で一層鮮明に見えてきたのではないだろうか。

「この町は人の暮らしが木と共にあった頃の、良き時代がそのまま息づいているようで好きです」

という彼女に、横浜に戻りたいと思ったことは無いのかと尋ねた。

「たまに都会に帰ると、地球じゃないみたいに感じます。周りに緑がないし、虫や鳥の声も聞こえないし、灰色の要塞みたい」

そう答える本間さんの表情は明るく、気負いが無い。自然人としての彼女のアンテナは、この山の暮らしの中で、ますます研ぎ澄まされ、感度をあげていくことだろう。

文／金山淑子 写真／小林 恵





独り暮らしでタイマグラを守ってきた向田さんと照屋さん



奥畑充幸さんと奥さんの陽子さん、2人の男の子たち

## 山の暮らしに魅せられて

早池峰山麓タイマグラに移住、奥畑ファミリー(岩手県川井村)

5年ほど前、テレビで早池峰山（早池峰山）の麓タイマグラで独り暮らしをして野菜をつくり味噌や漬物を手作りしている老婦人が紹介され、ぜひ会ってみたいと訪ねたことがある。5月、やっと雪が消えたタイマグラは木々がいつせいに芽吹き、川は音を立てて流れ、川辺には水芭蕉、ふきのとうが咲き誇っていた。向田まさよさんというおばあさんは出かけていて留守だったが、すぐ近くの廃屋を改装して暮らす若者がいた。間もなく大きなリュックを背負った若者もやってきて、秋までここで野良作業をするのだという。

本誌の今回の特集企画を考えるに当たり、あの美しい山麓をまた訪ねてみたい、でもあの時の若者たちはもういないだろうなと思って役場に問い合わせると、頑張っているよ、人数も増えたよと言う返事をもらうことができた。

### 長男、次男に続いて両親も来村

早池峰山(1914m)は遠野地方に暮らす人々のシンボルで、霊峰として崇められ、祭事等の伝統行事も多い。タイマグラは麓の集落から約10キロm、車で20分ほど入った山深い場所、戦後の開拓地だというが、30軒程あった農家はみな下山し、向田さん一軒となった。その向田さんも7年前にご主人が亡くなり、まさよさんが独り暮らしをしている。

各地の山歩きをしてきた若者、奥畑充幸さんはこの山里が気に入って、向田さんの自然のなかで遅く伸びやかに暮らす姿に魅せられ、ここで暮らすかと決意した。

5年前にくらべてすっかり整備された道を登っていくと、雪が来る前にと薪割りをしている男たちがいる。それが奥畑さんと父親の奥畑善弘さん(64)さんだった。



薪割りする奥畑さん親子



大阪の三男が届けてきたゴールデンレトリバー

充幸さん(37)は廃屋だった農家を借り、「フィールドノート」という民宿を経営、そこを訪ねてきた山好きの客の一人、山城陽子さん(30)と結婚した。大木ちゃん、森ちゃんという名前の二人の男の子がいる。

充幸さんの弟の正宏さん(30)も6年からここにきて陽子さんの親友・安部智穂さん(30)と結婚。彼は桶などを作る木工職人になり、





二男奥畑正宏さんと  
奥さんの智穂さん、結ちゃん



両親と充幸さん



宮古で修業してきただけあって  
桶職人としての腕前は確かだ

小高い場所に新居を作り、結ちゃんという1歳半の女の子がいる。

二人の息子が都会での暮らしを捨てて移住してきた山里の生活、それを見たいと会いにやって来た大阪・堺市に住む両親もタイムラグが気に入ってしまい、平成8年8月に市場の中で長年営業していた金物店をたんでやってきた。二人の息子夫婦の住む中間辺りに新居をつくり、家族たちの交流の場になっている。

もう一人三男が大阪にいますが、彼は来ないかわりに、愛犬のゴールデンレトリバーを移住させてきた。

冬にはマイナス15度、雪も30〜40cmになるという厳しい環境だが、そんなことを苦にしている様子は誰にもなく、薪をトラックで何台も仕入れて、ストーブで赤々と燃やししながら、読書や手芸をしてのんびり暮らすのだという。

他に3〜4軒の新しい家も出来て、おばあさん只ひとりだった地域が、イターンする人で新たな大地へと変わろうとしている。

「買物には週二回ほど皆の注文を聞いて出掛けます。宮古へ行くとな新鮮な魚介類もいっぱいあり、ここで暮らして不便ということは何もありませんね」と若い奥さんたちは言う。

ひとりは横浜、ひとりは松江出身の農業の経験もなかった女の子たちが、家事や野良仕事をし、子育てもしている。けなげでまぶしいほどだ。(ちなみにこの二夫婦は夫婦別姓)

### 向田さんに学びながら

道を猫をおぶって登ってくる青年がいた。彼が春から秋までやってきて野菜づくりなどしている照屋靖さん(東京出身・31歳)で、猫は奥畑正宏さんの家に預かってもらい、い

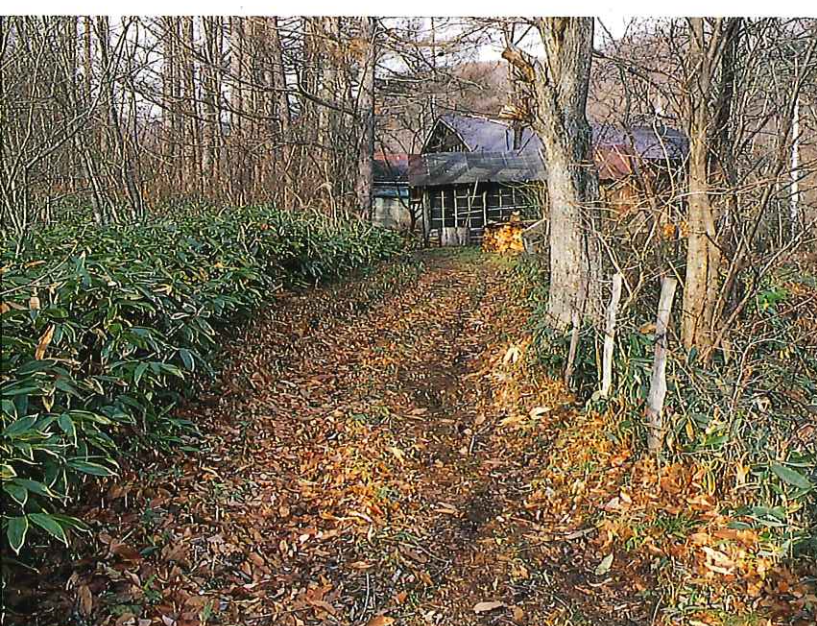
よいよ明日下山するのだという。

「4月まで東京で在宅介護などのアルバイトをして働き、また出かけてきます」という。

照屋さんは無農薬の人参などの高原野菜と大豆を作り、大豆は向田のおばあさんが味噌を作る材料に供する。山の畑で作った有機栽培の無添加味噌は美味しいと評判で、遠くからも買いにくる。

お別れの挨拶にいく照屋さんについて行く、「もうわたしの取材は嫌だよ」といっていった向田さんだが、にこやかに迎えてくれて、「お茶でものんでいけや」と言う。

充幸さんの家のすぐ裏手に住んでいるので、家族同様に付き合ひ、男手のいる仕事は充幸さんが手伝い、陽子さんたちは向田さんから味噌や漬物、郷土料理などを教えてもらって



向田さんの家へ向かう山道





◀遠野地方の霊山、早池峰山  
タイムグラは前方の下の方にある

▼農家をそのまま生かした奥畑  
さんの家「フィールドノート」



いる。私も3年ものという味噌を買い求めてきたが、昔ながらの大豆の香りがして本当に美味しかった。

**あるがままの環境の中で  
自然体**

ところで、奥畑さんの住まい「フィールドノート」だが、農家が農繁期のときだけ来て泊まった家ということもあって玄關らしいものではなく、狭くて冬はすきま風も入ってくる。



▲次男・奥畑正宏さん一家と新居

増築をして裏手に家族部屋もあるが、彼は客には古い農家のほうに泊まってもらうことにしているという。それがよくて毎年やって来る客が多い。

「民宿がはじめて登場した頃は農家などの普通の家に泊まり、その暮らしぶりを体験したり交流するのが本来の目的だったが、今ではミニ旅館化してしまった。保健所などがトイレをつくれ、台所はこうしろといういろいろ指導していることもあり、民宿としてのカテゴリが失われてきている。旅は異なった文化や風土にふれながら、自分を探すのが目的だとおもうので、民宿は原点に戻るべきだとおもっています」と充幸さんは語る。

彼は東北3県で進めているグリーンツーリズムのコーディネーターの一員で、立派な施設を作るのではなく、あるがままの自然と風土を生かした休養村づくりを提案しつづけている。テレビもない、新聞も毎日はいらないという充幸さんだが、本は山のようにあり、そんな彼の生き方に惚れて陽子さんのような素敵な奥さんもやってきた。



▲長男・奥畑充幸さん一家

「Uターン、Iターン者に対して町や村が特別に手を貸すことはないと思っています。かえって負担になり、気分で自由な生活が出来なくなることもあります。川井村は積雪が多くなると除雪してくれませんが、面積が日本一広いので、そうは手がまわらない。私たちも覚悟して来ていますから平気です。冬は冬眠して暮らす、だからいいんです。むしろ村にはこれ以上山間部を開発したり道路を広げたりしないようお願いしたいですね」

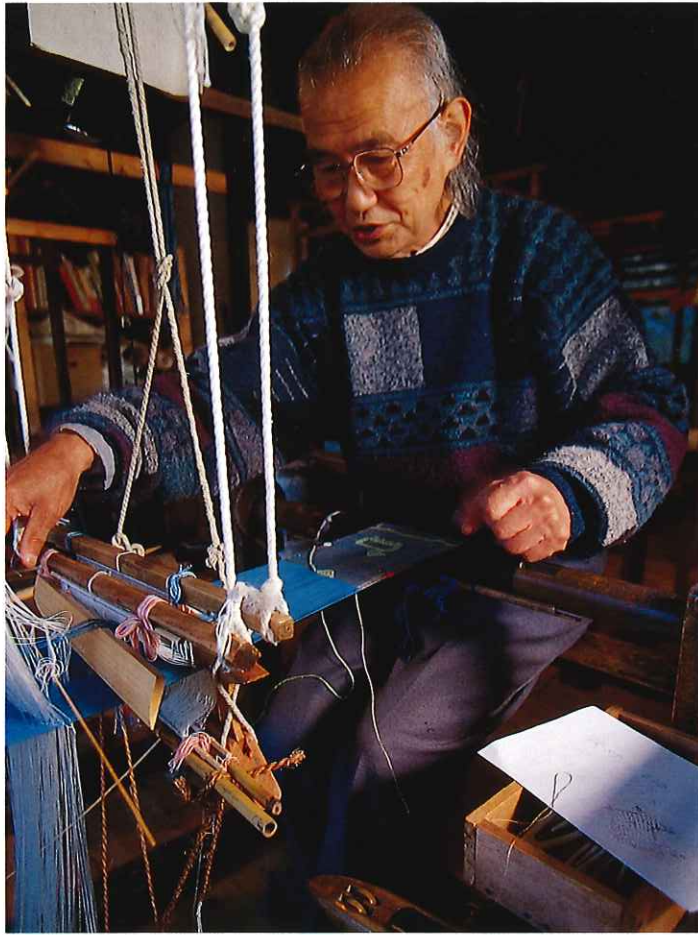
早池峰山に抱かれた大自然郷・川井村は、西部は盛岡市に、東部は遠野市に接する総面積563km<sup>2</sup>の村で、人口は4300人。

タイムグラとは、アイヌ語で「小さな流れの多い森」、「人の集まる森」という意味だそう、**「私は一人其処へ行きます」と言う説もあると充幸さんは言っていた。**

そんなアイヌの言葉がびったりする森は、明るく、風の音、水のざわめきでにぎわっていた。

文／浅井登美子 写真／武田栄一





川淵夫妻。ご主人は織物、奥さんは染色の指導に当たる



## 障害者と共に“手仕事”を—— 山里の機織り工房、昼下り [志とり工房](岐阜県岩村町)

ひたすら進化し、発展し続ける都会の暮らし。それは果たして本当に人間らしい暮らしなのだろうか。そんな疑問をもった元高校教師と国家公務員の夫妻が、木曾路の南端に土地を見つけ、機織工房を開いた。

身障者の人たちを中心に、さまざまな人たちが集まって、日本に古くから伝わる織物など、手仕事の技を学んでいる。

### 山道を歩きたがらない 子供たち

入口に「志とり工房」と書かれた農家風の佇まい。仄暗い土間の向こうに機織り機が数台並び、温かみのある手織の布があちこちに掛けられている。壁際の棚には草木染らしい淡い色をした糸の山。ストーブの火が赤々と燃えている。

川淵和彦・恵子さん夫妻が開いた織り物工房「志とり工房」は、木曾路の最南端、岐阜県恵那郡岩村町の、のどかな山あい建っていた。

ちよと昼休みの時間らしく、工房は人気がなく閑散としている。「こんな暮らしかあるんだなあ」と、その不思議ななつかしい雰囲気感動していると、ご主人の川淵和彦さん(70)が現われた。

名古屋で高校教師をしていた川淵さんは、15年前、定年まであと数年という時に、国家公務員の労働基準監督官をしていた奥さんの恵子さんとともに、この岩村町へ移り住んできた。

「学校教育に限界を感じていたんですね。教師がどんなに理想をもっている、いい学校に入れていい会社に就職させたいという親側の固まってしまった価値観がある訳ですから」川淵さんはそんな心境に重ねて、「地下鉄に



乗っても、泥のついた靴をはいている人が一人もいない」というような都会の生活に、疑問を持ち始めていた。遠足に行っても、子供たちは山道を歩きたがらない。土なんて踏んだこともないような子が沢山いるのだ。

そんな折、学校の授業で訪ねた身障者の福祉施設で、さまざまなハンディキャップを持った人達が機織りに取り組んでいるのを見た。「ドイツにモデルケースがあるらしいのですが、そこでは全盲の人が機織りの全工程をこなしているんです。以前から身障者の人の自立を助けながら、共に暮らせる共同体づくりのようなものを、漠然と夢見ていたんですが、その機織りを見て、その考えが大きく一歩前進したんですね。これなら一緒に仕事が出来ると」

これが大きな弾みとなって、川淵夫妻の夢は具体的なプランとなって動き出すこととなった。

### 地元のおばあさんから 機織り技術を習得

土地の取得は思ったよりずっと困難だった。バブル経済の時期だったこともあり、土地を探しているという、地元の人達には土地転がしか何かと敬遠された。やっと奥さんの蕙子さんの親類のつてを頼って、現在の岩村町の土地を購入。どうしても山も欲しかったので、山の一部と平地と合わせて3、000坪（1ヘクタール）を手に入れた。

勤めていた学校を辞め、蕙子さんも仕事を辞め、移住の準備が始まった。

中央自動車道恵那インターからクルマで30分程の、静かな山あいに拓けたこの土地は、背後に山、敷地の前に小川が流れていて、川淵さんの理想に近いものだった。

現在工房に使っている建物は、農家の人が古くなったので納屋として使っていた、というものを譲ってもらい、移築した。300年は経っているという、風格ある立派な民家だ。機織りをやろうとは決めたものの、川淵さん夫妻にはその知識も経験も全くない。そこで教えを乞うたのが、地元の3人のおばあさんだった。機織りは土地の女性の誰もが身に付けていた技術で、昔は自分の着物は皆、自分で織っていたという土地柄だ。

工房を開いてからの3年間は、機織り教室という形で、川淵さんや知人、地元の人などが集まり、このおばあさんたちから機織りのイロハを習った。

川淵さんが織りを習得し始めたころから、近在の身障者の人や、「麻の葉学園」という目の不自由な人の施設からも沢山の人が、この「志とり工房」へ通ってくるようになった。ちなみに「志とり工房」の名の由来は、この土地の織物の神様の名前からとったのだとか。

### 子供たちが染め物に挑戦

この日、奥さんの蕙子さんの担当する染物工房の方には、不登校の子供たちの施設から、数人の子供たちが先生とともにやってきて、藍染めのバンダナづくりを楽しんでいた。

元は母家だったという、「志とり工房」に隣接したこの建物は、染め物の工房となっていて、お昼やおやつの休憩時間には、皆で集まってお弁当を食べたりお茶を飲んだりする茶の間のような場でもある。

温かな陽ざしに包まれた工房の昼下りは笑い声に溢れて何とも平和だ。都会にいれば弾かれてしまっていたかも知れない、さまざまな形の社会的弱者の人たちが、ここではそ



- ▲出来上がった作品は展示会で販売する他、希望者に頒布もしている
- ▶上/志とり工房建物 右側は染物工房  
下/今では貴重な織機がずらりと並ぶ工房内部





▲山羊と一緒に軽トラックでやってきた徳田さん  
糸づくりから機織りまで見習中

れぞれが「持ち場」を与えられ、新しい可能性にチャレンジすることが出来るのだ。

### 自然のあり方は 発展ではなく循環

工房の一角の小部屋で、糸車をカラカラと廻しながら糸を紡いでいたのは、徳田多実さん(26)だった。かたわらには気持ち良さそうに猫が眠っている。昔話にでもでてくるような光景だ。

多実さんは2年前に長野県の浪合村から、軽トラックに山羊を乗せてやってきたというユニークな女性。大阪の大学を卒業し、「農業を勉強したくて」長野の農園で一年間お百姓仕事をし、「志とり工房」には織物を修業にきた。

畑で育てた綿を紡いで糸にし、ひと月かかってやっと織り上げた反物を、自分で売りに行ってみたが売れず、逡巡した挙句に、近所のお年寄りに頼んで羽織に仕立ててもらい、それを故郷の祖母に贈ったという。

かたわらで川淵さんが楽しそうに苦笑している。  
多実さんの織った反物はふっくらと柔らかかな風合いで、草木染で染めたという萌黄の色が美しい。

「志とり工房」にはさまざまな人たちが通ってきている。

「ハンディキャップをもった人たちが、何とか自立できるようにと始めたことですが、まだまだ難しい点は沢山あります。今のところは私達夫婦の年金と、地域のボランティアの方たちの協力、それに展示即売会での売り上げやカンパなどで、何とか成り立っています。今後は販路の開拓や、新しく「裂き織り」の技術などにも取り組んでみようと思っています

す」と、新たな課題や目標に川淵さんは意欲的だ。

「この土地を選んだ理由のひとつは、木曾路が薬草の宝庫だということなんです。藍染めの藍や紅花など、染の原料はもともと薬草なんです。衣服を染めることで、昔の人は毒へびやしらみから身体を守っていたんです」

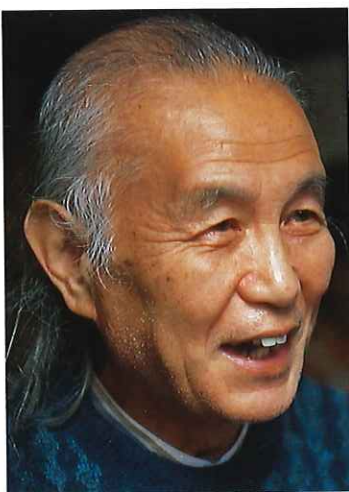
川淵さんは昔の人のこうした知恵や無駄のない生き方を、現代人はもっと謙虚に学ぶべきではないかという。森林を見ていると樹木が年月をかけて極相林をつくり、風土に合った極相林ができあがると、それ以上は発展せず、ひたすら循環をくり返すのだという。

「社会は発展するのだという考え方がありますが、自然のあり方は発展だけではなくて、循環なのです。そういうことに気が付きました。都会の暮らしは発展していくことばかりに夢中になりすぎていますね」と川淵さん。

織物という、かつては女性なら誰もが親しんだ暮らしの中の仕事。だからこそ、地域の人たちにも受け入れられ、今では薬屋さん、うどん屋さん、家具屋さん、町の商店の主婦たちまでが、この工房に通ってくる。

忘れかけていた手仕事の確かさが、さまざまな人たちを巻き込んで、見直され、伝えられていこうとしている。

文／金山淑子 写真／小林 恵



新たな目標を意欲的に語る川淵さん  
志とり工房 ☎0573-43-3456





右ノ田中正信さん、左ノ海藤平太さん。コロボツクルの家で

### ムラで狩猟採集の生活をしたいノ

大石田町へ来て、ゆったりと悠然と流れる最上川を見た時、田中正信さん(46)は「ここだ」と思った。

「はつきり言って、僕はニューファーマーの落ちこぼれです。最初から農への熱い志があったわけではなく、イワナやヤマメと遊びたいという極めて不純な動機で山形へやってきたのです。できれば狩猟採集の生活は成り立たないものかと真剣に考えたものです」

最上川へ注ぐ沢に入って溪流釣りをし、最上川でカヌーを楽しむ。たまにはちよつと車

### ●ムラを元気にする風になる①

## “誇り高き落ちこぼれ”は皆んなの人気者

「大石田百姓保存会」事務局長

田中正信さん(山形県大石田町駒籠)

をとばして最上川を下れば日本海へでて海釣りもできる。

そんな夢みたいなきことを考えていた田中さんに移住を本気で決断させたのが、大石田町駒籠地区の農民たちとの出会いだった。

奥さんの富子さんが天童市の出身だったこともあり、夏休みには東北へよく来たが、通りがかった大石田町で「百姓保存会直売所」の看板を見た。そのネーミングに興味を持ち同会代表の海藤平太さん(47)達と話をしてみた。

埼玉県岩槻市で小学校の教師をしていた田中さんは、いじめや登校拒否児童に深く関わっていて、教育実践活動の中に農業体験や農家との交流の道を取り入れたいと思っていた

ので、誇りに満ちた海藤さんらの姿に心を打たれた。

「稲刈りが終わればゆつくり話ができる。またこいや」という海藤さんの言葉に従い、田中さんは晩秋の頃やってきた。

「こいつ本気だな」と海藤さんは思ったが、「寒い雪の中で暮らせるかな。その頃来てみよう」と言った。

2月、田中さんは看護婦の奥さんと二人の子供(中1と4歳の男の子)を連れてやってきた。「これはもう本気だ」と保存会の人達は迎える準備をし、長い間空家になっていた築60年の家を整備した。平成3年4月、田中さんは首都圏での17年間の教師生活を辞め、トラック2台を従えて親子で移住してきた。

その後、奥さんの富子さんは尾花沢病院に勤め、平成5年には海藤さんの隣に家を新築して両親も呼びよせた。

「すべて百姓保存会の人達と母ちゃんのおかげです」と田中さんは言う。

### 大石田百姓保存会の人々との出会い

大石田百姓保存会は、平成元年に海藤さんから5人のメンバーで結成した。

「百姓は暗い。駒籠でも本気で百姓やる若い者がいなくなった。百姓を明るく楽しくやろう。自信を持つていいものを作り、都会の消費者と交流していこうと始めたわけさ」という海藤さんは、養豚と米、野菜づくりをする専業農家で、エサをしつかり食べて運動をして育つ豚たちは丈夫で、クスリ等は一切使わない。生産販売部長をする星川松雄さんは無農薬米作りのリーダー的存在で、米ヌカなどを入れた肥えた土壌で育った稲は、冷害や病害虫にも強く、おいしいと大変人気がある。



雪の日の大石田町  
左は田中さんの家 駒籠地区





同様に、有機栽培野菜や日本一おいしいサクランボ、スイカの生産者が中心になって会を運営。これらこだわりの農産物は、山形コープや首都圏コープ等を通して消費者に直接届けられている。農家のおばあさんが育てた四季折々の野菜などをパックにしたセットも同会がはじめて取り組んだ企画で、いまでは各地の生協でも試みられるようになった。

移住してきた田中さんは早速、百姓保存会の事務局長に推され、以来、会報作りや産直品の注文・発送などに多忙な毎日を送っている。ファーマーとしての田中さんは、水田70アール、畑40アールを借地し、いずれも無農薬栽培をしている。いまでこそ中古の田植機を使っているが、当初は「20日間四ツンばいになって田の草取りしたら、直立歩行ができるピテカントロプスに戻るまで10日かかった」と笑う。

農業の大変さ、厳しさを身をもって一つ一つ体験しながらも、それを「心地よい生活」と思い、いつもユーモアで人を笑わせる田中さんは町の人気者で、農家の人達の励みにもなっている。

### 交流の家「コロボックル」

百姓保存会の人々のたくましさ、結束力、努力の様子を物語るのが、会の交流の館として建築された「共生の家・コロボックル」。建築材料費の一部を各地の生協組合員やJ・A山形養豚グループが協力してくれたが、海藤さんらが中心になって3年がかりで作り上げた手作りの家である。

地元産の杉や檜を切り、子供達も手伝って皮をむき、設計から大工、内装まで、すべてを自分達で行った。

「僕は高い所が苦手ただだうろうろしてい

るだけでしたが、この辺の農家の人は大工としても一流で、何でも作ってしまう。凄いな」と田中さんは感心する。

私達が訪れた日は、山形に最初の大雪が降った日だったが、コロボックルの家は暖炉が燃えて暖かく、私たちは前日ここへ宿泊しなかったことを悔やんだ。

丸太を大胆に使った家は木の香に満ち、1階は広々としたリビングルームに厨房等があり、2階には5人用から2・3人用の宿泊できるベッドルームが3室、20人程度の団体が利用できる30帖の広間がある。内装も高級ペインション以上だが、大半をお母さん達が丹精こめて作ったというから驚きである。利用した都市の人達もここが気に入ってアクセサリーや置物を持ってきて置いていくらしく、楽しい夢の家という雰囲気にあふれていた。

食事は原則として自炊、宿泊料金は布団代程度と安い。地元のお年寄りも息抜きにと仲間ときて宿泊していくという。夏には前庭で毎晩のように飲み会が開かれ、祭りや農産物販売会が行なわれ、田中さんの企画で哲学者内山節氏を囲んで「哲学を学ぶ」等の勉強会も行なわれている。

### 農業をやる若者に「百姓の資格」を

田中さん、海藤さん達が今考えていることは「百姓に資格を与えること」だという。

米作りナンパーワンの星川さんでさえこの冬は出稼ぎに行った。海藤さんは300頭の豚を飼育しているから専業でやっていけるが、長男は就職のため家を出た。ただし、「生きものと関わった仕事を」と志願し、東北サファ

リパークの象係に抜てきされたというから、いかにも海藤さんの息子らしい。



共生の家「コロボックル」。駒籠地区の入口にあり、春は四季折々の花鉢も置かれて美しい下/内装も手作り。楽しい交流の場である

「若者が農業で食べていけるようになるために、百姓に資格を与える制度を作ることです。本気でやる気のある若者には、みんなが金を出して農業のプロフェッショナルになってもらい、後継者のいない農家を手伝ってもらうなどして職業として確立し、食べていけるようにせねば」

この発案に大石田町の農業委員会も賛同し、5反歩を試験場として提供してくれることになった。農業年金制度の見直し、従来から行なってきた都市の消費者グループとの交流や農業体験研修等に加えて、農業を本格的にやりたい若者を育成する機関も作っていききたいと考えている。

実は田中さんは学校での教師は辞めたが、自宅で問題児たちを受け入れてきた。「どこにも行き場のない子供達が沢山います。





「西の正倉院」前

日向の奥深い山間の里、南郷村は「西の正倉院・百済の里」として全国的に知名度を高めている。日韓交流のシンボルである「百済の館」、伝統的な南郷建築を再現した葦葺屋根の「南郷茶屋」や百済小路などに加えて、平成6年にはついに念願の「西の正倉院」が完成。百済伝説は時間と空間を越えて、南郷の地にしっかり息づいている。

訪れる観光客に、南郷の風土や百済伝説の語り部として、また貴重な建造物や展示品の

ガイド役の一人として多忙な日々を送っているのが小嶋久雄さん(32)。

村が100%出資してつくった(株)南郷クリエーション、昨年オープンした(株)南郷温泉の係長を勤める。

「メインは営業です。観光に関する企画や旅行会社やグループの方へのPR活動と団体様のガイドですが、ウェイターもしますし店員もします」

ソフトな人柄、丁寧な口調で、百済伝説の



南郷茶屋

## 航空パイロットから「百済の里」の語り部に 小嶋久雄さん(宮崎県南郷村)

事件を起こして監護院に入ったが、就職の場がどこにもない。2年間我が家において、いま隣の村で大工の見習いをしている若者もいます。少年は見習中なので収入は月5万円。その中から親に仕送りしているの、小遣いが足りなくなり、少し危ない状況なんです」

奥さんの富子さんや両親の理解があるからこそ、少年たちを受け入れてきた田中さんだが、個人では限界もあり、再び教師となつて夢だった私塾的な学校を作りたいと考えている。

自由人・田中さんの田舎暮らしを経済的にも支えている奥さんは、尾花沢病院の看護婦長をしているが、「地元の人達だけでは活力が生まれないと、自分で東京へ新人の採用にでかけるんです。何しろ凄いい母ちゃんです」とこやかに語る。

田中さん、海藤さんの案内で、次子子地区

へ手打ちそばを食べに出かけた。最上川をはさんで駒籠地区の対岸の丘陵地にある部落で、雪が一段と深い。ここも田中さんが親しくしているテリトリーの一つで、10軒のそば生産農家が共同経営するそば処「次子子」がある。地元産のそば粉をその日食用にする分だけ挽いて手打ちしたそばは何しろおいしく、お通しにつく漬物や野菜の天ぷらも嬉しい。田中さんは、お年寄りからそば打ちもマスター、人手不足の時は手伝いに出かけ、自分の畑でもそばを栽培しはじめています。店にはUターンしてきた若者も働いていて、そばによる地域おこしが着々と実を結んでいるように見えた。

最後に田中さんから都市生活者へひと言。「都市で暮らしておられる皆さん、不安な毎日がいやになったら、書を持って街を出ましよう。農への志を持って立派に営農し、日本農業の活性化に貢献するもよし、私のように



▲自慢の手打ちそばを持って  
(そば処 次子子レストラン)

誇り高い落ちこぼれになるもよし…。皆が書を持って街をすたした時、きつと時代は変わります。変えちゃいましょう」(山形県新規就業ガイドセンター・パンフより)

文/浅井登美子 写真/武田栄一



## ●ムラを元気にする風になる②

語り部としての役者性も十分で、この仕事にびったりと感じたのであるが、3年前に東京で採用されて初めて来村したのだという。しかも前職は大空を翔ぶパイロットだったというから驚かされた。

南郷村からそう遠くない高鍋町の出身。しかし少年の頃の小嶋さんは、南郷村のことは知るよしもなく、大空を駆けたいという夢を追い続けて、高校を出るとアメリカの航空専門学校へ留学した。パイロットの資格を取って帰国し、名古屋に本社のある中型機の航空会社に就職。副機長として全国各地を飛び回った。

「バブルがはじけて、中小の航空会社は合併統合をせざるを得なくなり、私は地上勤務を命じられました。空を翔ぶことだけを夢見てきて、先輩や同僚が第一線で飛んでいるのに私は地上勤務。ショックでジレンマに悩みました。そんな時、『南郷村を好きになってください』という募集記事を見ました。同じ地上勤務なら新しいことに挑戦してみようと思っただけです」

奥さんも同じ宮崎県出身。奥さんの勧めもあって応募したところ、田原正人村長から百済の里づくりの素晴らしい話を聞き、「この人に付いていこう」と決心したという。

その時採用されてインターンしたのは、デパートで長年指導的立場で働いてきた土屋博長専務と「西の正倉院」の学芸員を勤める長坂昭代さん。3人も南郷村がすっかり気に入って、村民に代わって観光の村づくりに励んでいる。

「ビールも冷やせば美味しくなるように、観光にも付加価値をつけたい。この地に言い伝えられてきた百済王族の話ストーリー性を持たせて伝えたい。観光客は中高年層が多く、

2時間で見ようという人が多いので、紙芝居なども用意して説明します。厳しい予算と人材のなかでやっていますので、ここまでが仕事というわけにはいきませんが、それだけにやりがいがあります。知力、体力、気力です」

百済伝説に関する施設に加えて、昨年南郷温泉「山霧」がオープン、すべすべして美肌効果のある良質な天然温泉で、夜遅くまで近郊からも人々がやってくる。そのため帰宅するのは11時頃になってしまいうことも多いという。取材にお伺いした時も夜遅くまで案内してくれた上に、翌日は宿へ8時半に迎えにきてくれて、施設をガイドしてくれた。

今から1300年ほど前、唐と新羅軍に滅ぼされた朝鮮半島の古代国家、百済国の王族達は日本に亡命し、やがて山深い南郷の地に流れ住んだ。平穏な日々も束の間、激しい戦火のもと、一族は最期を遂げた。

伝説とは言いながら、そのことを物語る祭りや百済王を祀る神門神社があり、さらに不思議なことに国重要文化財で奈良正倉院にある銅鏡と同じものや唐式鏡17面が保存されてきた。これに着目した村長と役場職員、民俗学者らにより、壮大なロマンを秘めた百済の里が誕生した。瓦や敷石を韓国から取り寄せて韓国の名工が造った「百済の館」には韓国からも大勢の人が見学に来る。

門外不出とされた奈良正倉院図をもとに、すべての部材や屋根の葺き方まで寸分の違いもなく再現した「西の正倉院」は、観光施設というよりは歴史的価値をもつ画期的な建造物で、木曾から取り寄せた2000本の松を全国から集めた宮大工達が当時のままに手作りした。その様子などを小嶋さんは丁寧に説明してくれる。本格的な施設に視覚的な見せ方、それらを手際よく情熱的にガイドする小



神門神社の前で、小嶋さん



「南郷温泉・山霧」の運営管理も担当



▶百済伝説を語る小嶋さん。「百済の館」で

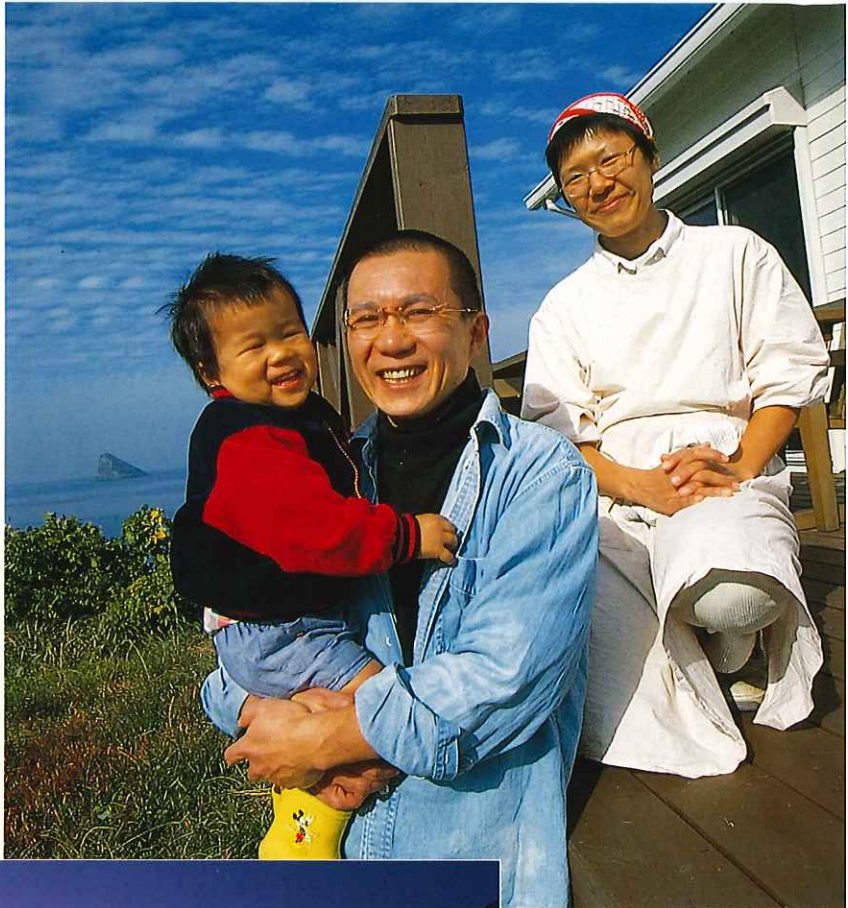
嶋さんの手により、しばしタイムスリップしたような心地であった。子どもは2歳と4歳の二人がいて村営住宅に住んでいる。

「南郷は子育ての環境としてもとてもいい。住民も子どもたちもおおらかで親切で、小学生は観光で来た人に、こんにちわ、さようならとあいさつをするんです。沢山の課題を抱えています。第二の故郷として頑張っていきたいと思えます」と小嶋さんは語っていた。

そういえば私たちが車で走っている時も、道で行き交う時に子どもたちはごく自然にこやかに頭を下げてくれて、感動したものである。

取材・浅井登美子





▶松永夫妻と三男亮君

▼夕映えが美しい

## 大島は見処、味処がいつばい

地続きでどこへも自由にラクに行ける私達にとって、フェリーに乗って島へ行くことは胸をときめかすものがある。待合室にはその土地の匂いや人々の語らいがあり、フェリーに乗って眺める島の風景は旅の情緒を感じさせてくれる。

長崎県西彼杵半島の西北端、西海町のわずか1キロメートルの沖に浮ぶ大島。大和田からフェリーが15〜20分間隔で、佐世保からは高速艇が1時間に一本運行しているので、「島へ渡る」というほどのイメージはないが、それでもしばしば旅の情緒を味わいながら島に着

く。  
フェリー発

着所の北側に

は1500人が働くという大島造船所がある。

豊かな石炭の島だった大島だが、昭和45年に閉山。人口は最盛期の2万人から一気に4分の1に激減した。当時企画課長だった秋山隆雄町長らがあらゆるツテを頼って企業誘致に出かけ、昭和48年に住友グループの大阪造船所の子会社「大島造船所」を誘致した。世界的な造船不況が続いているが、中型船の造船でシェアを持ち、その日は完成間近な4隻がドックに姿を見せていた。

町へ入ると島とは思えないような近代的なマンションが並んでいる。造船所で働く人達



# 大都市ホテルマンは島へ移住して ペンション経営 松永仰一さん夫妻（長崎県大島町）

の社宅で、商店街も活気にあふれていた。

周辺には町営住宅もあり、なかでも北側の小高い場所に一昨年オープンした町営住宅はレンガ作りのおしゃれなガーデンハウスで、セキュリティ設備等も完備した全く新しいタイプの住宅であった。

大島造船所の左手の林の中には大島アイランドホテルがある。船の進水式典には欠かせない社交の場として作られたホテルだけに大変デラックスだが、ホテルのもう一つの話題が地ビールの醸造・販売。ビールの本場ドイツのバイヤーマン社から原材料を直輸入してドイツの指折りの醸造職人の指導で開発した「大島地ビール」は、最近各地に登場した地ビールとはちよつと違って、通も舌をまくというこだわりの個性豊かな味が3種。湾の風景を見ながらホテル内のレストランで味わうビールは格別だが、東京銀座や横浜でも取り扱っており、知名度を高めている。

酒造等における大島町の取り組みにはすでに実績があり、昭和60年に町と大島造船所が第三セクターで酒造会社(株)大島醸造を設立した。町内産のサツマイモを使った焼酎「いつもの奴」等は、いまでは長崎を代表する酒として人気を持続している。

酒造と同様に乗り出したのが緑健農法とい



▶パリアフリーの町営住宅



▶大島町は焼酎産地としても人気



▶日本一美味しいトマトの栽培





う新しい栽培方法で作られているトマト。ポルトガルの原種に近い苗木を育成し、水等ができるだけ減らして大地と太陽の恵みで育てたトマトは、水に入れると沈む(普通は浮く)そう、コクとうまみに富み、一個500円で取引されるといふ。20棟近くある近代的なハウスには、春の出荷をめざすトマト達がたわわに実をつけていた。

**家族の暮らしを大切に  
して移住を即決**

さて、そんな活気に満ちた大島町だが、一歩島内に足を伸ばすと、雑木林や小さな段々畑があり、10数カ所に集落が点在している。旧産炭地だったため漁業で生計を立てている人はほとんどなく、自家用の野菜を作る程度。

廃家も二、三見られる塩田地区だが、半島の突端はサンセット村とよばれる町の新しい観光ゾーンで、現在2軒のペンションがある。その一つ「マイネフロイデ」が今回取材させていただいた松永さん夫妻が経営するペンションである。

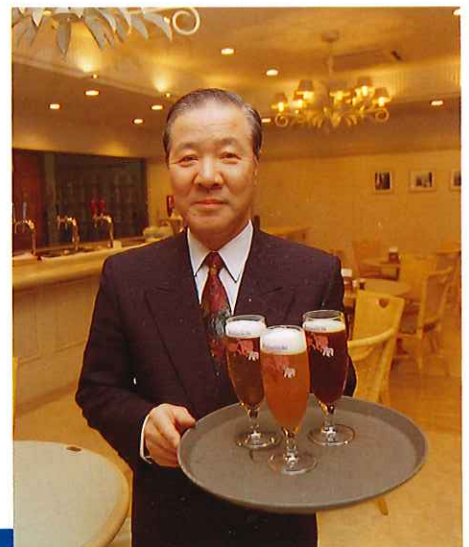
松永仰一さん(37)は兵庫県西宮市の出身。京都外語大学でドイツ語を専攻、卒業後は大阪のロイヤルホテルに就職、平成3年に福岡県の系列ホテルに転向して、10数年間宴会や婚礼等の営業、演出を担当してきた。

妻アズサさん(37)は中学時代の同級生で、大学は農学部。4人の子供がいる。二人にとって「子供達を自然の中で育てたい。農作業もしながらペンション経営をする」というのが夢で、各地のペンション村を見て歩いた。

雑誌で大島町のことを知り、見学に訪れた。「役場の職員がフェリーの着く桟橋まで出迎えてくれて。2日間つきっきりで案内してくれました。町長にも会い、あなたのような家族に来てもらうことが町民にもいい刺激となり活力となる、と言われました。島の人達の人情の豊かさが強く印象に残りました」

ペンションをやりたいが観光地はいや。代わりに豊かな自然があり、野菜は自分たちで作りたい。町が案内してくれた場所は、松永さんにとって理想の場所だった。西側には東シナ海の紺碧の海が広がり、落日の美しさは格別。元農地だった台地は現在芝生や野草の茂る広場となり、周辺は雑木林。小学校は西大島地区にあり、歩けば子供の足で20分ほどだが、家を出たところにバス停があり、町が通学時間に合せてバスを運行している。

借金をしたくないと、松永さんは西宮市にあったマンションを売り、その年の秋に大島



▲大島アイランドホテルにオープンした地ビールが飲めるレストラン。支配人が自ら3種の自信作を用意してくれた

町へ移住してきた。町営住宅に入り、ペンションの建築に着手する。

「遊休地等を町が所有者から無償で借りて、耕作可能な農地や宅地に復元・整地してイーターン等に貸し出すという制度で、借用料は町を通して所有者に払うことになっています。一部農地の借り上げが手間取ったため工事が遅れましたが、一年半町営住宅に入って町の人達と交流したことが、とてもよかったですと思っています」

松永さんは住宅地として200坪、他に畑を3反歩借り、年間約13万円の借地代を払う。島の風景を生かした南欧風のペンションは平成9年4月にオープンした。

**遊休地を再生して  
U・イーターン者に**

一般に島というと、イターンしたくても宅地や農地が手に入りにくいといわれているが大島町は全国に先駆けて農業振興課を設け、平成5年に職員達が島中をくまなく歩いて「農地戸籍」の調査を行なった。大変な労力だったが、その結果、農地177haのうち、



▶大島アイランドホテル





▲帰宅中の長女遙ちゃん、長男岳君  
▼泥遊びが好きな三男亮君



「地元にあるものをできるだけ生かして工夫すること」を大切にしている。

大島へ来て三男の亮ちゃんも生まれた。すっかり島民となった子供達（小学5年、3年1年）は一段とたくましくなり、朝食も自分たちで作って食べて7時には

は出かけて行き、放課後は釣りクラブなどに参加し、島の暮らしを満喫している。

ペンションには島内の若者達もフランス料理を食べたいからと出かけてくる。しかし、年間を通して安定的に来客があるわけではなく、また松永さん自身も、あくまでも家族との生活を大切にしたいと考えているので、団体客などを入れて回転率を高めるといやり方はしたくない。「とはいっても貯蓄もそろそろ底をついてきたので、今年あたりは少しアルバイトに出ようかなとも考えているんです」とポツリと語った。

### 松永さんの音頭でコンサート

私達が出かけた日は、松永さん夫妻が音頭を取って、国際的に活躍するテノール歌手、辻裕久さんと作曲家・ピアニストのなかにしあかねさんによるクリスマスコンサートが開催された。共に東京芸大を出て渡英、ロンドンを拠点に活動してきた音楽家だが、なかにしさんがアズサさんの妹さんということで大島町での演奏会が実現した。今年で2回目に



なる。クラシック演奏ができる県内有数の設備を誇る町民文化ホールはこの日を楽しみにしていた主婦や子供達でほぼ一杯になった。神戸市から来た女声合唱団30人と大島町女声合唱団の合同コーラスも行なわれ、日本ヤスコットランドの懐かしい歌やクリスマススの歌を思いがけずじっくり聞く機会が持てた。

同コンサートを主催した教育委員会小山教育長は「松永さんのような方が外からの文化の橋わたし役になってくれて助かってます」と、会の成功を喜んでいた。

準備等で松永さん夫妻は大忙しだったろうが、文化活動を通じて町民との交流がまた一つ深まったに違いない。

文／浅井登美子 写真／小林 恵



◀町民文化ホールでのクリスマスコンサート。神戸から来た女声合唱団と大島町女性合唱団との合同コーラス下はコンサートの成功を喜ぶ小山教育長と松永さん。左は指揮者中西さん(アズサさんの父)

閉山後の人口流出で4分の1が不在地主になっており、所有者が亡くなり家族は土地の存在すら知らない地主なども多数いることがわかった。

この調査の結果、大島町は県の「遊休農地活用緊急対策事業」のモデルとなり、約100haに及び耕作放棄農地の再生・活用により出した。4年間で約20haの荒地が農地に戻った。荒廃農地復旧用に山羊を入れるというユニークなアイデアも取り入れられ、松永さんの隣のペンション「かもめ」にも山羊が10数頭飼育されていた。雑草をきれいに食べて、土地も耕し、フンで土壌も肥えるので、荒地対策に効果があるという。

ペンション「マイネフロイデ」（ドイツ語で「私の慶び」の意味）は、松永さんがホテル勤務で蓄積したノウハウを生かして、本格的なフランス料理を提供、奥さんのアズサさんはパンやケーキづくりの名人。

当初は欲しい材料が手に入らないため佐世保市まで買い出しに行ったが、いまは島内で入手できるようになった上に、松永さんは、



最上川の河畔。地上に急降下し、獲物を捕らえて飛び去るノスリ



1月、村山盆地越冬地で鳴き交わすペアのノスリ

# 心は大空を翔び、草原や沼に佇む 鷲鷹に魅せられて30年

真木広造 (動物写真家)

## 葉山のフシナツノ王

私が住むみちのく山形県は、西に羽羽山地と朝日連峰、東に奥羽山脈、南に飯豊連峰、吾妻連峰の山並みに囲まれ、満々と水をたたえた最上川がゆったりと内陸庄内平野を蛇行する。

フシタカたちはフナ林等で営巣しながら、冬期には最上川や周辺に広がる果樹園や水田等へ舞い降りてきて餌を取る。猛禽類にとって山形県は彼らが生息できる自然環境がある数少ない地域の一つである。とくに朝日連峰のフナ帯は白神山地の約二倍もある。白神のフナ原生林の世界遺産登録は春秋林道の開発等でこれ以上破壊が進まないようにという意図もあつてのことだが、朝日連峰には手つかずの自然も、けものも多く、私が撮影しているイヌワシも10ペア近くいる。

小さい頃から最上川周辺を歩いて野鳥を観察するのが好きだったが、猛禽類の魅力に取りつかれてしまったのは25年程前のこと。葉山へタカの観察に行つた時突然大きなワシが目の前を音もなく滑空していった。一瞬ワシと真正面から見つめ合った。その重厚な迫力、大きさに圧倒され、私は身動きできず感動にふるえた。ワシはやがて霧の中へ吸い込まれるように消えていった。

フシタカ類の営巣シーンは、ある程度知識と技術を持った人なら撮ることができる。テレビも巢作りし子育てして幼鳥

真木さんは山形県を中心に、国内や世界各地で30年間鳥類を撮影し、日本産鳥類全種(570種)を記録、中でもフシタカ類の捕食行動を観察・撮影した貴重でダイナミックな写真は昨年「日本の鷲鷹」(平凡社)として出版され、話題を呼んでいる。



●まき・ひろぞう氏/1948年山形県河北町生まれ。日本野鳥の会山形県支部長。日本イヌワシ研究会会員他。

が飛び立つまではよく放映するが、大抵そこで終わってしまう。

彼らの生の営みは実はそれからなのである。餌を探し求める姿、高い岩場や木あるいは上空から急降下しながら獲物を取る時の猛々しいシーン、縄張りや雌をめぐり争いなど、鳥たちの生きざまを記録していきたいと思つた。その精悍さ、凛々しさ、反面、猛禽とは思えないほどの穏やかさ、可愛らしさなど、フシタカたちの魅力をナマでカメラに収めたい。

そのためにはフシタカ類の生態を徹底的に知ることである。自分が彼らの一部になり、厳しい自然の中に身を置くことである。

## 5年間全国行脚

少年時代より野鳥に興味のあつた私は高校を出ると最上川近くの工場に勤め、夜明けから出勤時間まで、昼休み、退社後は日が暮れるまで川辺や周辺の農地を歩いて鳥たちを観察した。朝日連峰の山の家を営む志田忠則さん(80)からは、森



▶カムリワシ。サトウキビ畑でしとめたサキシマハブと格闘、レンズを気にすることなく獲物を食べ続けた（沖縄西表島）



に棲むけものや猛禽について実に沢山のことを学ばせてもらい、各地の野鳥の会の人たちも数々の情報を寄せてくれた。22歳の時、腎臓を患ってネフローゼという難病の宣告を受け、一年間入院生活。家族や周辺の人々の力に支えられて無事退院したのを機に、今まで趣味的に行ってきた野鳥撮影にさらにのめり込んでいく。難病との闘いを経験して、私は耐えること、あきらめないこと、待つことを学んだと思う。

河北町役場に勤務しながら退社後は一分一秒も無駄にしまいと野山へ出かけていたが、36歳の時サラリーマン生活にピリオドを打って動物写真家として独立した。今までの貯金に手をつけられないこと、5年間で目鼻をつけることを妻に約束して軽自動車に寝泊りしながら全国各地への取材活動を開始した。当時野鳥の写真などで160万円ほどの収入はあったが、フィルム代などを除くと一食100円程度やらなければならぬ。キャベツを丸ごとマヨネーズをつけて食べたり、川水や雨水を飲んだりもした。北海道では氷点下20度以下の中で温かいものを一口も口にせず1か月間軽自動車の旅をした。寝袋の中で寝るが朝起きると車の中もバリバリに氷が張りついている。それが溶け出すため、機材をぬらさないようにするための拭取り作業が結構大変だった。沼などに何時間もじっとしていたり、

頭に頭布など被ったり、迷彩色の服装でうろうろしていると、時に怪しまれ、石などを投げられたこともあるが、不思議と辛いと思っただけは一度もなかった。こんな生活がかえって私を心身ともに強靱な人間にしてくれたと思う。

見知らぬ土地で、地元の長老たちから森や野生動物の話聞くのも楽しみだった。山間部では私を奇人変人扱いせず旧知の友達のように親切に接してくれた。私はまるで自分が鳥になったように自然の中に身を置き、彼らと同じ思いで獲物をじっと長時間待った。そして鳥と共に飛翔する思いで、北海道から沖縄、さらには国外へと歩き続けた。

33年間、570種の野鳥を撮り、これらは『みちのくの野鳥』『日本の野鳥』として出版された。日本のワシタカ類30種もすべて撮り、昨年『日本の鷲鷹』（平凡社刊）として出版することができたが、取材活動は今後も生涯かけて続けたい。家で写真を整理したりしている間も、彼らが「早く来い」と待っている間も、ような気がするし、餌を取りそこなった幼鳥のその後も気になる。

### 鳥の性格と行動を熟知する

写真を撮るためには、まず徹底的に行動と単体の性格を調べることからはじめる。

例えばノスリの場合、最上川周辺に40〜45羽が見える。車で40mほどまで近づいた時、逃げる、車を止めると逃げるの2パターンがほとんどだが、一、二羽逃げないのがある。警戒心があまり強くない鳥である。

そんな逃げないノスリを5個体ほどマークする。彼らにはテリトリーがあつてだいたい同じ場所にやってくるという習性があるので、私の方は、約500mのワク内の5個体について、来る時間、止まる場所を調べ、さらにまわりの風景、背景等を考慮して2つほどにしぼる。3日または4日に一回飛んできて、この木に止まるといことがわかると、いよいよ撮影のための準備に入る。これまでが仕事の80%である。

鳥の警戒心は、種類によっても違があるが、国や地域によっても分異がある。大型で精悍なカムリワシは猛禽類の中では警戒心が一番少ない。私がマークしていたカムリワシは、エサを取って飛び降りた地点に私が近づいていっても逃げる様子はなく、獲物のハブと闘争しはじめた。草地の中で捕えたので、「しまった」と思ったのだが、ハブがあはれたためワシが動いてくれて、見通しのよく所に出たところを寄って撮影できた。（写真）

カムリワシは沖縄を中心に生息している。沖縄には豊かな自然と、人々が動物と共生してきた風土があり、それが鳥たちの行動にも現われている。

外国へも年30〜40日間は出かけているが、国によって鳥の警戒心はかなり違う。一般にヨーロッパやアメリカなどは鳥獣保護が行なわれているので鳥たちは警戒心が少なく、中国や韓国等の東南アジアの鳥は遠くからでもすぐ逃げてしまう。鳥は食べるものという食文化のせいだろう。アジアでもイギリス領だった香港だけは警戒心が少ないから不思議だ。



▼ハヤブサは空中でしか狩りをしない。  
3日目にやっと目的の枝に止ってくれ、  
気品のある姿が写し出された(山形県飛鳥)



日本もようやくヨーロッパ諸国に近づきつつある。しかし警戒心は、野生動物が生きていくためには必要なことで、警戒心の少ないものは撃たれたり事故にあったり、他の動物の餌になったりして、次第に淘汰されていく。野鳥の世界でも強いものが生存できるのである。

さて、撮影用の鳥を選び、その行動がわかったら、いよいよ撮影準備。ネズミ、ハト、ヘビなど猛禽類が餌場にする場所(調理場)から7〜8mのところの木を立て、それに布を覆せる。やがて木を3本に変え、それに鳥が慣れて警戒心がなくなったら三脚、カメラに切り変える。

そこから100mほどの場所にテントを張り、シャッターはラジコン操作。望遠レンズはシャープさに欠け鳥の表情もわかりにくいので、殆ど使わない。

動物が近づくとセンサーが作動して自動撮影するという方法も試みたことはあるが、これは風や落葉などにも反応するので莫大なフィルムが必要な上に、求める表情は得られるとは限らない。

**身近にいる野鳥も瀕死**

自然界においては、生物は他の生物を喰って生きている。残酷に見えるかもしれないが、私たち人間も豚や牛や鶏の命をいっただいて、生きているわけで、それらを含めた生きざまを見つめていきたいと思っている。野生動物が生きていくことは大変厳しく過酷である。飽食時代の中で、人間が多くの生物や自然を犠牲にして生きているのだということを見つめ直す機会になればという思いもある。

30年間全国各地を歩いてきたが、野鳥

の生息できる環境は著しく悪化している。湿原や干潟は急速に減り、雑木林はなくなり、人里離れた民家周辺でも農用地が荒れているために、今まで身近に見られた鳥たちの姿が減っている。農薬等で渡り鳥やスズメなどが大量に死ぬ事故もあとを絶たない。

野鳥保護というと、絶滅危機種だけがクローズアップされやすいが、従来日本に沢山いた野鳥たちにも危機がせまっているのである。

例えば畑や牧草地に沢山来ていたオオヨシキリはその数が激減しているし、美しい声で春を告げるヒバリやホウジロなどの里を代表する鳥も、その声を聞く機会が減らない。

野鳥が餌にする野草や木の実、営巣できる自然環境が田舎にも少なくなっているのだ。ダムがないことが自慢の美しい最上川でさえ、葦は私の子供の頃の10分の1に減った。野鳥達の最後の楽園である河川敷は各地でコンクリートの堤防に生まれ変わった。魚やネズミ等の餌となる生物がいらないから猛禽類も生息できない。

もう一つ心配なのが電磁波。渡り鳥は太陽と自分の体内の磁気により飛翔方向を正確に測って何百キロの旅をするのだが、最近では空中を人間の放つ電波が縦横に飛び交うため、彼らの体内センサーを狂わせている。訓練した優秀なハトを飛ばすハトレースでも帰還するハトの数がかなり減ってきているという。携帯電話等の普及で空中は強力な電磁波が覆っているらしい。人間は地上だけでなく大空までも我がものにしてしまっているのだろうか。

(談・編集部収録)

## De POLA NO.16

[てぼら] '99 春夏号

発行日/平成11年3月15日

発行所/全国過疎地域活性化連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷/株式会社 ぎょうせい

協力/編集工房アド・エー/地域活性化センター



ビデオ完成間近!

歴史おもてなし  
一町並み保存と町づくり

VHSカラー30分

平成10年度制作ビデオが間もなく完成します。

かつての繁栄が偲ばれる、古い町並みを大切に保存、修復して町づくりに生かし、今や観光地や交流の場として多くの人々が訪れるようになった、中国四国地方の3町(岡山県勝山町、広島県豊田町、愛媛県内子町)を紹介いたします。

全国各地でCATV放映も予定していますので、どうぞご覧ください。

## 編集後記

▼待っていれば豊かなな恵みが与えられる。

それが田舎の暮らしです。そう言ったのは岐阜県岩村町に移り住んだ川淵和彦さん。春になれば木の芽や山菜が次々と顔を出す。種をまき、苗を植えれば収穫ができ、鶏は卵を産んでくれる。ムラには都会とは異質の時間が流れているようだ。待っていればランニングコストばかりが重んでしまう都会では、やっぱり急ぎ足で歩かないのかもしれない。



# Dream

いい夢  
いろいろ。

たいせいでつかいじやんホ至くじ。コジコジ懐じつろくくじ。  
週3回抽せんで大いにときめくナンバース。その場で当たりがわかるインスタントくじ、などなど...  
求める氣分に「ひったり」なときめきがきつと至くじなら見つかるよ。

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の  
助成を受けて作成されたものです。



宝くじの収益金は、  
公共事業に役立っています。



財団法人 日本宝くじ協会

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。